

『ね……………。』

『あるわ。ぢあゆるしてね。さつきの……を……………。』

『いいとも……………僕のも……………。』

『いいわホホ、、、。』

伊楚子も哲也も謝罪し合つた……………。

『ぢあこの荷物もさくくのねわ。』

『あ……………。』

『わたし出してあげるわ。』

伊楚子はほんごに、ほぎき出しので、哲也は慌て、側へ起きて行つた。

『すまない。いいよ。』哲也は當惑相に云つた。さいふのは伊楚子が自分を

され丈思つてゐるかと思つたからであつた。罪のあるいつらであつた。

『ぢあいいの？』さあきたらない眼元で哲也をみたなり、さつきからの行違ひ許りで痛んだ胸の爲めに、伊楚子は悲しくなつてホロリと嘘から涙を落した。

『いや……………。』

『まあ……………。』

伊楚子は泣く泣く荷物をほぎきはじめた……………。

『伊楚子さん……………すまないねわ。』

『わたしからかはれるのだわ。おほいて仰在いよ。泣びり……………。』

『あら……………いいちゃん？』

「しりませんよ。」

さうさう伊楚子は聲を立ててなき出して了つた。

哲也は初めて……我に歸つた。後に廻つて「いいちゃん。許してね。」

「ゆるすもゆるさんもありやしないこゝよ。人を侮辱なすつたのだから。」と伊楚子はラケットでも振る様な手付きで怒つた。哲也は出来る丈伊楚子に寄りつて、深い溜息をしてみせた。哲也は彼女の涙で濡れた手を固く握つて伊楚子を覗いた……彼女は顔をツンと反向け、「わたしわからないわ。」と咬きながら暫くして固く熱い手で握り返した。二人はホツミ顔を赤らめた。降る様なベゼがろの次に起つた……。

伊楚子 冷やかにろれをまたたきもせず見守つてゐたが暫らくして云つた。

「今日ごんなにして暮すの？」

「ろうだねわ。僕。テニスも下手だし。散歩位するよ。雨さへ降らねば……。」

哲也は立膝を崩しながら云つた。

「まあいいわ。キット今日は御歸りにならないのでせう。」と念を押した。

「さつき伊楚子さんが来る前に美佐子姉様がいらして止すこゝにした處だつたの……。」

「まあ随分だわ。今迄かくして居らしたのねわ……つみよまあ。」と伊楚子は繁々こあきれた様に彼を見守つた。

「許す？」

「許さない。」

「慘酷だ。」

二人は又争ひ初めたが結局水掛論に終つて了つた。

「今日日曜ね。」と伊楚子は考へ考へ不安相に云つた。でも眼はもうこつくに笑つてゐるのだつた……。

「あ……。」といつたもののわからなかつた。

「今晚はE教會へ行かない？」

「君クリスチャン……。」

「勿論ですよ。米國に居た時から……。」

「ぢあ夕方から……僕もクリスチャンだよ。」

二人は……それをたのしみに別れた……。

夜がめつきり明るくなつてから哲也は無性に眠たかつた。その頃……眞柄はE市E新聞社主催の乗馬クラブに出て行つた。美佐子は夏期講習だといつて、哲也が歸らないのを幸ひにこれもE縣立女學校へ出掛けて了つたので、眼をこすつて炊事場へ行つてみたがガランとして淋しかった。鼠が土間を幾十匹ななく群を作つて流しの下の馬けつの捨物へウヂャウヂャミ一切に落入つてベチャベチャやつてゐた。と彼をみるなり臺所の隙間へ逃げた。

「あ……いやらしい。こんな世界もあるんだ。皮肉だな。誰れが指揮するともなく、一切に突撃しては總退却をする敏捷さ……面白相な世界だなあいやらしいけれぎ、多夫多妻主義者の群れ……。」

彼はお勘定……ミ云はれた時以上に面白く思つた。

『姉ね……ねね……。』

彼は曲線的な聲で子守を呼び掛けた。

『はい……。』

姉は炊事場の直ぐ上の室に居つたらしいS子の金属的な聲が上の方で起るミ、ストーンストーンミ階段を秀ちやんミ一諸に下りて來るらしい。

『……ねねお前御飯も……。』

『アラ……まだ居なすつたん？』

『ここに居る……。』

彼は食事を終るミ、何をしようかミ思つたが名案もなかつたので、室を出て

二年の室のオルガンをひいてみたが、次第次第に悲しくなるので止しちやつた増築された新しいペンキの香の高い一年の裁縫室の黒板で、いろんな女の顔を書いてゐたが、それも馬鹿らしいミ思つてまた、茶室の側の小さな室へ歸つて行つた。

『姉ね。今日おかあさんに乳を貰ひに靜ちやんを脊負つてE縣立女學校迄行くのかい？ひるに……。』

哲也は茶室へ歸る歸る炊事場の壁へもたれてレースをやつてゐたS子をみつめて問ふた。

『毎日行つてゐます。』ミS子は大きな眼をキヨロンミさせてはつきりミ云つた。

『ぢあ僕あの邊へ遊びに行くから一緒に頼むよ。』

『わい…………。』

Sは軽ろく語尾を引いて答へた

午後にならぬ迄にH縣立女學校へ行つてゐればいいのに、Sは用事が無いので、十時頃からブラブラ白いバラソルで靜子を蔭にして出て行くのだつた。太陽が焼けつく様に哲也の脊を射抜いてゐた…………。

『美しいちゃんは、よく毎日この暑さに通ふもんだ。』みつくづく病身な大杉は感心して歩いてゐた。もう目がグラグラしてならなかつた…………。

大神宮を左に折れて、金星町を行つた。金星町云へば金星らしい柳瀬みや何んぞか名乗つてゐるバツシヨネットな寫眞屋がめつかつた。シヨウウインド

ウらしい硝子の中に九條武子のうつしわが目をひいた。嘗つて…………本願寺支部會に出席した際の記念たらうと思つてよくみてゐるこ、そこに脊高な三ツ位の子供をかゝわた、よく似た婦人が淑やかにうれをみてゐた。やはり寫眞はつまらない…………彼は啞いた。歌人らしい頭髪の結び方から着物のこなし具合から瓜二こいつた調子だつたろの女…………それは莫蓮者らしいこ思ひ思ひ白粉の中を視る様に覗いた。冷淡らしい女だこ思ひ思ひして…………。

『この方九條武子様でせう？』こ當然婦人は話し掛けて高い鼻を左右に動かせて北叟笑んだ。知つてゐるのに云つたわいこ腹の中で答へ乍ら『ここへ一度いらしたこ思ひます。』こ頷き乍ら云つた。

『…………。』

もう哲也の方へは見向きもせず、じつこみいつて了つてゐた。

『女さいふ者はあんなに虚榮心の強いもんだ。』こいたづらな眼でうれさなく他の寫真にみいつてゐた……。

船頭町方面から来たかと思はれる跣の女の子が、黒いコーモリ……うれも破れて了つた、うれで日影を作つたつもりで、タランミ横の方へ首をたれて眠つた男の子を小さいすこきでくくりあけてゐる……女が、何んの氣でか、うれの女のろばへ立寄つた。やはり九條武子の寫真をみた……。

『あら、ろんなむごい負ひ方をして。帽子もかぶせずに、病氣を起して了つたらごうするの？。お食事はしたの？。』こ今迄視詰めてゐたマダムは俄にろのみすほつた女の子に同情した。哲也はハツミしてろの様子に氣を配つてゐた。

面白いぞと思つた。

『わつちか……ひるめしはまだ。』こ女の子は指を喰へて小さな聲で云つた。鼻の黒くこは張つて爪の先からも黒血の様な固い塊が滲んでゐた。

『ホウ……さうかねね。ぢあ私し何か買つてあげませう。ホウろんなに子供をしてゐては苦しくつてよ。』こマダムは顔を繋めて汗ばんで臭い子供を覗いてゐるが、大杉を見ていたづらな眼で笑つた。マダムは近所の店屋で菓子を一包求めて與へた。ろの子はいくごも禮をするかこマダムば反身になつて凝視して居たが、何んにも云はずに氣心惡氣に容赦なくクルリこ廻つてスタスタこ歩き出した。マダムはあつけに取られて期待にろつて呉れない淋しい瞳で見送るのだつた……。

「あの女……乞食ぢやないか。」嘲笑ふ様な調子で……スーミ荷車を引いて通た先きの様子をみてゐたらしい男が云ひながら挽き過ぎて行つた。マダムはそれを耳にせずに、縁房の白銀に輝くバラソルに埋れて大杉の行く方へ軽ろやかに地を叩いていつた。マダムの足が長かつたのか大杉の足が遅かつたのか、四丁目邊りでまた會つた。

「あの子……可哀想でしたこゝこ。」

マダムは執拗な眼で以前話した様な調子で充されぬ心で彼をみて呟く様に云つて淋しく笑つてのけた。柳町へ出て右ミ左へ別れた。

山家往還こいふか常盤町の衝當りを歩いてゐるこ、反古買町の様な氣持に打たれてこんな處に女學校があるのかこいやになつた。往還の兩側には車がこの

家々も一臺は置捨てにしてほつてあつた。

E 縣立女學校では講習の最中こみねて、エブロン姿のテキバキした氣持いいマダムや令嬢等の賑やいだミーティングが右手の白亞館で開かれてゐた。

「姉ね……もうお乳は？」こ哲也は姉ねを見つけて云つた。Sは頷いてみせた。校舎を左に廻つて運動場に出た。やはり増築中で職人がワイワイ云つて騒いでゐた。

「あすこで野球をやるのよ。」こSが教へた。

「ね……？ 女が？」

「ねね……。」

哲也は子守こいつまで話してゐたつて仕様がなこ思つて、また校門の方へ

歸つて、美佐子にも會はないで、石橋を渡つたその時に、驚いた。以前柳町で別れたはずのマダムミビツタリミ會つた。手振りでこんごは居た。

「……あら學校へ……お姉様？」

マダムは軽るく會釋して立止つて淑やかに見下した。

「は……。僕の姉に會ひに遊びがてらに……。」

マダムは自分を知つてゐるのだと直覺した時に刺し殺す様な婦人の視線を危く僻けて俯向いて了ふより道はなかつた。

「わたしMの方をしてゐます。御遊びにいらつしやいね……。」

「は……。」

哲也は脊高なマダムの後姿を眺めて歸らうと向き返つた。何んもなく初めて

心がききめいた。天野香久子の従者……を思ひ出してはトボトボと交り易い足に力を入れて楽しい物でも得た様に町中を汗ばんで歩いた。

朝間の雨模様も空風も収められて……やがて慰安の夜の帷りが次第にたれてくれば、數多の工場は湯を吐いて仕事を止めるのだつた。E教會堂ではうれ迄には、ちやんと準備が整つてゐた。人を靈に導く勇ましい夕べの鐘、が異禪の空からでも響いてくる様に、會堂守のつき出だす鐘の音は、總てのものを射抜いてゐた。

蒼社の上流へ堤防傳ひに松並本の下を遠乗したと、氣色ばんで、夕方眞柄が歸つてきた。

和服にしてから、鏡臺の前で髪をふくらせながら、早速……教會へお祈りに

行きませうよ、忘れないでいつた。

「食事が済んでね……。」

「……わたしちつとも……。」「真柄は遠慮振つて断つた……。」

「ごもかくたべてゆつくらして行きます。」

哲也は呑み込んでゐるさいつた式の氣乗らない聲で云つて、真柄の顔色を待
つた……。

「ぢあわたし一足先きに行きますわ。倶楽部の人々さお約束事が出来てゐま
すから……。」さ昂奮した口先でさへする様に云つた。

「ごんなごこち？」さ大杉は柱にもたれて靜かに彼女を見据ゑた。

「なーに大した事ぢあなくつてよ。」

「ぢあろう仕様。」さ哲也は行つても行かなくつてもいいさ云ふ風を粧つてダ
ランさ云つて炊事室へ出て行つた……。真柄はハツミして椽の邊まで後をつけ
て頼りない……理解のない奴ださ熱々さ後姿を恨めし氣に見守つた。

「わたし泣きたくなつたわ。」さ伊楚子は彼から眼を引取るさ項低れて啜いた
さ今迄張詰めてゐた心さ幻影さ終日の遠乗の爲めに少なからぬ疲勞を感じ初
めて、グツタリさ倦怠を覺ねはじめた。彼女は單獨で教會へ行きたくもないの
だつたけれぎ、案外冷やかにすました顔の哲也の態度に飽き足らず齒がゆくて
仕方がなかつた……。それ故心以外の浮口を云つたのが口惜しくもまた腹立たし
くなつて来て齒莖をむしりたい程餘りに輕捷すぎた自己の態度を罵つた。眉を
ピク付かせて、今夜彼がさんな刺激を受けるだらうさ考へた時に、今迄の總て

建設された黄金のタワーを我手に掛けて碎く様にも思はれて混迷の渦中に棒倒しに蹴落されたやうに頭が湧いてくるのだつた。伊楚子はかすかな呻きをたてて椽の上に骨を抜かれた者の様に倒れた。

伊楚子がE教會へ出掛けて了つても、哲也は棄鉢にゆつたりミ機嫌よく後から洋装して出掛けた。

教會ではもう祈禱が終つて居た。和服の伊楚子は婦人席の後の方の席で聖書と讃美歌を膝上に乗せて靜かに項低れてゐたが、哲也を見て側によつて來た。

『判りますか？』と讃美歌や聖書を教へた。初めてE教會へは出席したので氣兼ねはなかつたものの、誰一人ミして後を振かへらないので氣抜けがしていやになつて了つた。愛嬌のある頭のはけた舌の鈍い眼の奥深い洋服姿の牧師が

最後の祈禱を捧げていくらも間のないのに教會は閉ぢた。鐘がけた、ましく高いタワーの上で鳴つた。さやみやみや群れて木橋を渡る男女にまぎれて白線巻いた松山らしい高等學校生徒が順々しく眞柄と話し合つて大杉の後から出て行つた。

『あれかい。』と嘲笑つてゐる男の聲が、耳に傳つた時、齒の根のうづがゆい程大杉は當惑した。大杉は眞剣な顔が尙更硬直して固く固くセメントかペンキでも、頬を塗込められた様にもちつとも妥當的なフアミリアーな大膽さがうのささなアフエヤの中かから、人にはぎれ逃けたい程あれかい。ミ云ふ言葉と眞柄の半笑ひの姿を想像してみるミ、益々頬骨や頬肉が醜く肥大して顎がちつとも動かないのだつた。ミの驚愕から消ぬ失せたいといふ拒絶しがたい不條理な個

人的な反感に我乍ら淺猿しいと思へば思ふ程……侮辱された云ふ悶々の爲めに狼狽せずには居られなかつた。

『何んこいふ影の薄いこいだ。』大杉は憐れな自己の姿を鞭ち打つてもみだが、あの聲によつて惹き起された腹立しい浸潤さからは神経質な彼は廻避し得ないのだつた……。寂寥と羨望の中にうち沈むより繕れ上つた心を導く何物も路傍にも、明るい町にも見ひ出されなかつた……。彼は無遠慮に人を越し越し邪慳に家へ歸りたい氣分に浮されて、眞柄の事も忘れた様にスタスタ大股に歩き出した……。

『……大杉さん一寸まつて下さい。』云ふ伊楚子の聲が後の方で起つた。

『何んですか？』

哲也は洋服のポケットに両手を突つ込んで五月蠅相にみかへつた。人込みの中に燃ゆる様な伊楚子の眼と白線の意氣高な小さな崩れ形とがほんやりと盡れた。二人は次第に接近した。彼は暫し冥想でもする様に胸の動悸を制し制し靜かに眼を閉ぢた。エスの御手に……彼は胸の暗闇を消止め様としたがやはり不安に胸は動揺してならないのだつた。再び見開いた時にはもう互ひに話さへ出来る迄に接してゐた……彼はあの男をみて俄かに縮み上つてゐた氣象が現實化して興味づいたのを覺えた。その窮屈な視線の繩張りの中で彼は無抵抗主義者然と身の苛められるにみをまかせた——。

『この方ね。乗馬俱樂部の方で燁川安夫といふ方なんです。教會でも度々御目に掛かる方なのよ。』眞柄が紹介した。

彼は悪びれないで軽く握手して「僕。大杉哲也と申す者で何卒交際をたのみます。」とやつと夢見る心地で赤く焔の燃ゆる舌をすべらした。

燦川は冷やかに華奢なつばひろの帽子をこつた哲也の黒々とした長髪を無遠慮に覗きみて「失禮ですが、繪の方でも？……」と顔を傾けて伊楚子を見かへつて云つた。

「まだK中學にゐらつしやるのよ。」と伊楚子が頼りなさ相に云ふのだつた。

燦川はフンと冷やかに笑つて立止つた。哲也はドツと心臓を突ツかれた様にとちぢたころののがい侮辱めいた彼の舌觸りの痛々しさに、微塵も好感を抱持するこゝは不可能だつた程奔放な虚構な無關心な憎惡めいた蠢きの宿る彼の云振りにガクガクと齒並みが震へるのを感じいた。それよりも眞柄の冷靜ないた

つらな態度を目撃すればする程……心は焦つてきた。

「三人連でカフェーでも参りませんか……。」と伊楚子は燦川と大杉の眞中に這入つて云つた。

「それによからう。」と燦川は先づ賛成した。

「あなたさう……。」

眞柄は快活に晴々しく子供に云ふ様に云ひ云ひした。

「僕ですか？」

「わ……。」

三人はまた深くだまり込んで了つた。

「僕これで失禮します。」

『まあ……初めてなのに……ねー燦川さん。』

燦川は頭點いた。

『ぢや……行く事にしませう。』と不本意氣に哲也も同意した。

川岸端を右の小路に折れたところあるカフェーで眞柄を眞中に燦川と大杉が差向ひに椅子を占めた。伊楚子は嬉し相に生々した面に心持朱を散らして『何か楽しくエンジョイスルところはないかね。』と話しを吹掛けた。

『今日の遠乗位面白かつた事はありませんね。僕だつて、あの瀧淵の崖は困つたのに、いいちゃんをよく乗りこなしたもんだね。』と燦川は云つた。

『……アラあなただつてそんなに御思ひなすつて？わたしの馬はカゲだつたのでいやでしたこころよ。』

『……わたしは黒い鬘の馬よりもカゲ馬が長くつていいと思ふね。』

『だつて、一見よく似た馬ですわ。あなたの朝風もわたしの勿來もね。』

『うりや素人の云ふことで、大變勿來も馬さしちやいいと思ひますなあ。』

『だつて……勿來はあまり溫和なのでうの上小柄なわたしには重すぎて……』

『ハハハ、ハ、ハ。』

燦川は快活に笑つてコーヒーをすすつた。哲也もうれにつれて笑つたものの運動家は話す材料も見ひ出されないのだつた。彼は肩の痛むのを苦にして居た。

『何んの爲めにこんな處へ來たのだらう。つまらない男女を相手に。馬鹿ら』

しい。ろれよりも……。』大杉はギリギリと齒竝を震はせて二人の話しを靜かに陰鬱な蒼褪めた神経的な絶えず何物かの爲めに脅かされてゐるらしい弛緩したにやけた様な顔付きで神妙に燦川や眞柄の活氣の充滿した青年らしい顔や話振りにつりこまれてゐた……………。

ろの次の晩だつた。

明朝は愈々歸國するのだといふので美佐子が町へ行かうとすすめた。哲也はウンと答へて連れ立つて校門を出た。明朝は別れるのだと思へば……過ぎ越し方のたよりなかつた廿日餘りのだらしない生活が想ひ出されて大杉は今更の様に美佐子をみた……………。

「僕何故男子のお友達が何處に居ても出来ないのだらうかね。」哲也は悲し

相に云つた。

美佐子は歎息した様な息使ひをして哲也のあまりにいいこぢない心を透す様に見返へつて惱し相な神経を靜めて華奢な凝つた様な美少年の姿を恍惚と愛着のある何者かを模索する様な力強い瞳でじろりこみやつた。

「僕ね。昨夜も乗馬俱樂部の人と會つたのだが、お友達には出来ないと思つた。」

「なぜ……………？」

「話が運動家はちつとも合はないぢありませんか……………。」哲也は投げ出す様に云つて美佐子をまたみやつた。

「ろんなにしてまでお友達が得たいの？」

「いや……僕ほしくはないけれど……。」

「やつぱりほしいのでせう。けんちゃんの様な……。」

「あ……。」

哲也は東京に居た頃の楽しかった事をフト思ひ出した。

「あの頃は面白かつたがね……明桂寮でいいちゃんやなあちゃんも……トランプをしたり、鼻摘みしたりな。」

「ほんこにもうあれから何年になるかね……。」美佐子も指を折つて當時の花やかな學生生活を追想した。

「もうなあちゃんも何處に居るかね。」哲也はなつかし氣に囁いた。

「あの人ね。青島でもう死んで了つたのよ。家庭週報に出てゐたわ。」

「アラなあちゃんが青島で……ね……？」

哲也は涙ぐんで美佐子をみやつてゐた。

「みいちゃん何んこも思はない？」

「……思はない人がありますか。私も悲しかつたわ。あの方はね。早稻田の若い眞面目な文科の方。本淨寺で情ない噂を立てられた事があるのよ。あの當時お前はあんなこころをしてゐた頃だね……。だから知らないが、それはクラスで問題になつたのよ。濱田浪子を葬つてね、その時わたしは辯護してあげやうと思つたけれど出来なかつたの。到々あの人ね。一時休學を喰つた事があつたの。」美佐子は小さな聲で歩く歩く話した。

「あー僕が東京へ行く前のこころ？」

『ろう……』

『まだ僕がロシアに居た頃？』ミ哲也は物凄く北叟笑を洩して問ふた。

『ろうーだ。お前があゝの邊でブラブラしてゐた頃よ。』

ミ美佐子は強く恐れる様な瞳で當時を考へ出しながらまあよかつたといふ顔をして俯向いた。哲也は何んミも返事が出来なかつた。

『なあ、あちゃんは……死んだ。』

彼はいくさも繰返して考へてみた。丸顔の髪の少けない……。新橋へ送つてくれた……。『

『あの方も女の友達つて一人も無かつた方よ。お前ほんミに姉さんに心配さすよ。』

『ろう……』ミあつけない聲で云つた。

ろの夜姉は重蔵に送るミいつていろんな買物をした。哲也はろれを楽し相にみてゐた……。ろの歸るさ。

『一生懸命で勉強して……。』ミばかり云つてゐた。

ろの夜。ロシアに居た幼い頃の悲しい思ひ出が彼を襲つてならなかつた。あゝ思ふまいミ大杉は顔に手をあて、泣いた。あの當時學習院出のN文學士や専任のN教諭やT校長や……。ろれ等の優しい寛大な心が思ひ出されてK中學は實際自分を育てて呉れた忘れ得ぬミドルだミさへ思ひ思ひした。あの當時アクトレスであつた小さなベールはさうして居るミさだらう。なあちやの様に外國で死んで了つたのかしらん……。ミ彼は今更の様に細々ミ神経的な瞳を見張つた

り嘆つたりしてゐたが、あゝ思つては毒だ………と強く強く打消すのだつた。

翌朝横須賀で早朝E市と別れた……。

二等船室の窓から瀬戸内海の變化に富んだ海の景色にみこれてゐた………一望千里と迄はゆかぬものの、家に居るよりまりました。

船首みさしの方へ行かうとして前を遮つた清酒な婦人が居た。それはよくみればお雪であつた。よもやお雪ぢあるまいに覗いてみても、やはりうれしかつた。やはり桃割れに緋をつけてゐた。彼はハツミとさきめく心を押へて船室を出た。それは雪子に違ひなかつた。

『あゝちよつとあなたは……』と云ひかけたものの何んだか船員達や他の三等乗客の居る爲めに言葉が訥つた。三等客は一樣に大杉の珍らしい長髪姿を船

旅に倦怠した眼を突ツつく様に一切に注ぎ掛けた。大杉は云はなければよかつたお雪位の者を……と侮ひ侮ひお雪の方へ進んだ……。

『あなた失禮ですがお雪さん、仰有る方ぢありませんか？』とやつと意を傳へた。

『はいわたし沙田雪といふ者で……アラあなたは。』

『……濱で二度御合ひしましたね。茶店で。』

『わたしHの親族へ一寸道寄して、青島の舞鶴濱の沖の燈臺守になる事になつて……』と嬉しい様に呟いた。

『ホウ。』と大杉は吃驚した様に云つてつくづく沙田をみた。

『うんなに大きな燈臺ですか？』

『いいね。でもこんごから新たに建つんだ相です。』

『お爺いさんは？』

哲也は人目の少けない炊事室の前につれてきて問ふた。

『あれはわたしの爺父さんぢありません。一時買はれてゐたのです。』と彼女は涙ぐんで物語るのだつた。

大杉は新らしい世界を凝視めた様にうの醜怪極まる真相に今更隠れたる社會の犯行を呪はないでは居られないのだつた。あんな爺……うれも朴訥な、あいつがこんな若人を無慘に蹂躪するなんて無智な無謀な似たり寄つたりぢあなあと思ひ思ひ淺猿し相に溜息をついてゐる雪子をなだめる様に云つた。雪子は眞實に告白してゐた……。

『燈臺守もあてにあならないよ。青島は未だ物相だからね。幾人ももうあの舞鶴濱海岸で女が死んだ噂だよ……十分注意してなあ。Hに親類ぎもあるのかい？』

『いいね……』と彼女は泣き始めた。大杉はヒョツとした。

『だつてみよしに居た時にあるつて云つたんぢあないの？』と理屈っぽい言葉で問ひ詰めた。

『あれはうろでした。わたしうろですの。』と雪子は云ひ張つてゐた。

『うろかい。心配だなあ……青島へ行く返は。』

『ね……』と沙田は淋しく頭點いてみせた。店の女……こもみへぬ氣品の具つた眼鼻の立つた美しいひねこびない娘であつた。

「ろこへ行つたら僕に手紙をよこさないかい。」大杉は何んもなく云つた事がおかしかつたので自分で笑ひこけた。沙田もほゝんだ。ろして潤んだ眼でみいつた。

『……………わたしの様な。』

『いや……………僕は君を保護しようと思つてね。』哲也は悪い事を云つたもんだ。多感想に付け加へて云つた。

『わかりました。ありがとうございます。』

沙田は静かな水面をみて……………訴へるやうに云つて泣いた。大杉はこれ以上沙田に對して追及して尋ねるに忍びないと思つた。彼は名刺を渡して別れて船室へ這入つた。茶店で見た時の着物と同じなのをきてゐると思つて多感な大杉

は沙田が可哀想で可哀想で居たまらず立つたり坐つたりして時を過した。かくて時は過ぎてゆくだけれぎ沙田はろれぎりデッキへもたれて泣いてゐた。

横須賀丸は月下の海を何んの苦もなくすべり出した。休みになつた船員達が煙草を吹かせながら、油だらけの黒づんだ仕事服をつけた儘機關室の方からウヂャウヂャ甲板へ鼻歌をうたひながらよろよろと昇つてきて、一樣に月をみてゐるのだつた。沙田が船員がおかしなことを云つたといふのでバタバタ甲板へ降りて來たの。大杉はピタリ會つた。

『や……………もうU港ですね。』大杉がガツカリした様に云つた。

『……………』

沙田は細い聲で云つた……………。彼女はもうつかれきつてゐるが、何んとも云へ

ぬ月の光りに浮かされて最後ミいつたに風寄添つた。

「もう永久の御別れやら分らないミ思ひますわ。夏休の時にあなたの御姿をみまして……うれから今日迄ずつミお話し出来ましたのは、ほんミに忘れられませんか。あなたも御たつしやでねわ……。私も何處かへ落ちついたら御手紙差上げますわ。」ミ彼女はバツシヨネートな顔を突きつけて重つたるい聲で大杉の耳元で囁いた。そしてハンカチーフで口元をぬぐうた。

「僕はみづしらすのあんたミ、夏休の時から今迄……こんな關係に導かれやうミは夢知らなかつたよ。僕はあの廿何日の間で……一番同情したのは、あんただつたのだ。けれミあんたミはもう別れなきあならないんだ。僕は何處迄も世話して上げやうミ思つてゐる。しかしあんたは餘程氣丈でゐないミ取返し

のつかない事になつて了ふよ……。」

大杉はひややかに言つた。沙川はたゞ頷いてゐた。時ミ處ミ身分ころ差はあれ……アントアネットにうつくりの容姿を偲ばせる溫和な生々しな女だつた。

彼が日市の自宅へ歸つてから、楽しみの一つは、早朝郊外の野原へ散歩にでるこゝであつた。

朝露が小さな足へ飛び散つて濡れるのが……蟬も何も鳴かない靜寂な朝間には無上の心地快い事であつた。道を變へ變へて同じ野原を毎朝の様に徨つた。夜にお湯にしたつて直ぐ休んだ輕ろい軀を、つめたい朝風にさらす毎に彼の胸は平和に風いでゆく様な氣分に打たれた。でも……こんなにしてゐる内に、あ

はれ、淋しい感傷の秋は訪れて来た。高い聲で小女は唄ひ乍ら、寂れゆく野邊で、虫のなく草間で、月影に浮れる夜もつづいた。彼は山川にこある石に腰掛けてボンヤリ聞いてゐた。こんな夜がつづいた。女性程眞實に生きる者は他にない。彼はろの度につくづく味つた。眞面目に總てを判断し自己の能ふ限りの努力を盡してファーストラブの清い觀樂に浸りたがるものだ。女性のろれ位純眞美にして恐怖すべきものは他にあるまい。行先の知れぬ異性を慕つて地の果迄も海の極みまでもこさすらひを續けて行く女性、愛欲の情焰に夏簾の影に獨り心もろろにされろ失愛の寂寞に動悸を早やめる可憐な女性、極度の束縛を受けた女優達の愛欲を賣物に唄歌ひ行く旅役者の群、寺から寺へ身を捧げゆく巡禮の白衣の姿にも、可憐いらしな小女心はあるものを、哀れに鈴振り歌ふ

彼の聲ころは、心ゆく許り慕はしいものを暗示するのだつた。哀れに苦しい影ろれには各自の個性が或程度迄は生々こ發動してゐる。女性程眞實に生きゆく者は他に居ない……彼は恚んなに考へた。女性を唯一の友として……こ彼は思つた。男性から遠ざかるのだこ再び考へた。こんな楽しい夜が幾夜もつづいた。貧しくこも信んじ合つた生活程清く尊い家庭はないもの——こ云つた民子の言葉が忘れ様こしても忘れられぬ程彼はうれしかつた。………
…別れて後——。島吹く風はさらさらこ草の實を、ろほゆらして秋の影は日にこまやかに、臥戸の彼方此方には、虫すだき初めて、ゆわわかぬ涙ぐましい夕べがろの重さなるにつれて、眞柄伊楚子の捨てやつた心の中へも、今更の如くに、去にし日の甘い幸福な、偉大な保護の力に守られた而も儂い丁度夏の

短か夜のうた、ねにみし、夢の如き又は春の朧の月の櫻樹の下にほんの一夜だけ愛人ミ語つた様な、ろの捕へ處のないろれだのに、彼女にミつては最初の無我の愛を捧げたのはろれ程彼女の小さな胸は破れんばかりに苦しい……真に世餘日さいふ短い逢瀬——伊楚子は身も世もなく滅入る様に去にし日が思はれてならなくなつて來たのだつた。あたかも八月廿七日美しいけれぎもメランコリ——な月が昇りはじめた。丁度大杉哲也ミ別れて一週間目の晩だミ思ひ乍ら、椽先きからポブラーの樹蔭に浮んでゐる月を無心に眺めてゐた。眞柄は長い長い物思ひに沈んで了つた……。

『あ、つまらない。早く月日がたつて了つた。もう秋が來たのだ。あ、私は淋しい……あの月の青いトレモロを凝視するミ私はたまらなく彼が慕はしくな

る。あの月の様になんミ淨い彼れだつたらう。彼の心は眞に淨かつた。あの間私を愛して下したあの清い淨い正しい愛ミろの心ろれはあまりに、聖者であり私には手のミミかないものだつた程神に近い祈りの愛の所有者であつた。けれぎ私ほろれだけ、苦しい私はやはり弱い女だもの——女だもの——ぎうしてろの儘に彼を忘れて了ふこゝが出来るものか。彼は薄情者では無い。けれぎも私は、丁度デスアポイント、ラブしたのミ同様な心持ちにならざるを得ないがよはい女だもの。お——私は盲目になつて了つてゐるのかもしれない。ろれ程私は俗な世間的な普通の女であつたのだらうか少なくとも自分はストリクトな意志ミ情慾ミ知慾の所有者で人並優越した異性者からの渴仰を受けてゐた女だミ自信をも抱いてゐたのに、やはり私は愚な情に生死する特長のない個性のない

近松のおさんに似た哀れな最後を残す同じ舊い型の女だったのか、平安朝時代の女の様なつまらない影うすい總てに俗な悲劇をのみ誇る脆い女になつて居るのだらうか、あゝ自分は、封建時代の社會に生ひ立つた女のように、あらゆる社會制度の不自由不平等の下に生活する様な運命に束縛されて居るのだ。形式的な少しも酌量のない慘酷な社會制度の好い犠牲者の一例になるのぢあないかしら。自分はあの飄然とした蝴蝶の様な態度で無邪氣な女で而も強い永久の女性の典型ミなりたいろして自己完成の最高の理想に到達したい。ろれだのに、私には力がない。可弱い女ミしか、社會はかへりみないのだ。ミはいふものやつぱり弱い女であるかもしれぬ。ろの上賤しい。大杉ミ私を比較したならば私は水の中の魚の様なものだ。到底彼の澄み切つた潔い愛の所有者には手はミ、

かぬ。ろの上彼はいかに平民的なしろ自分の先生の弟なのだ。清く聖者であるべきが當然かもしれぬが、彼れにもやはり、青春の血がみなぎつてゐたことを、記憶して居る。或る盆の夜に、彼ミ天保山の濱邊を徨つた時に、あの青白い眞摯な面にオボコな笑をたゝねて、私に抱きつき乍ら二人が倒れ合つたろの刹那に彼は細い手を以つて私の脊をひきくさゝねて呉れたミ思つてゐた——伊楚子さん伊楚子さん御免なさい。僕を叱らないで下さい——ミ彼は私の耳元で叫んだ彼は私がホロリミ涙を地上に落したのを氣にしてゐたものの私の眞の意中を推察してゐなかつたられ程彼は正純な現實的な女を理解した新らしい新浪漫的な同情の個性の展びてゐたことを忘れることは出来ない。私は生れてからあれ程優しい異性の言葉を耳にしたことは無い。私はいつまでもいつまでも彼

の力のこもつた双の腕によつて眠つてゐたかつた——否々私は泣いたのだつた——まゝ、私は泣いたのだうれが爲にけれぎも彼はうれを知らぬ程聖者であつた。大杉は私が地上にブツ倒れて聲をたてて泣いた時に云つた情熱の爲に軀をふるはせ乍ら——伊楚子さん泣いちあいや。僕も泣くよ。なぜ泣くの。あなたの中の薔薇の様な顔が汚れるわ。あゝ、いいちゃん——僕はあなたをそんなに愛してゐたでせう。私はもう堪わられぬ我身の慄々に無中になつて彼の軀を抱きしめた。ミ彼はさも嬉し氣に初めて私の頬に熱した涙を一滴落した。しばし二人は無言の儘抱き崩れて頬摺して二人はわけもなく願ひの心持ちで一杯に胸を波打たせて、やがては別れる悲しみを想ひ乍ら、二人は離れまいと意志のかよふ迄になつた。英國詩人のカーペンターがミルソンへ移つてからあの露深き

野邊で原始的な農作や労働に従事してゐた時に小さな小屋で……私は地よお前の足の音を聞くの。段々近くなる、眼を閉ぢる私の顔を踏むミ我子の様な御前を感じるのミ云つた様な情熱で私は彼をうの儘、深い宇宙の中へ引きいれ様をした。うしてろんな生活を願つてゐたうの瞬間……。彼には何等の野望も野心もない愛が即ち之れ彼うのものであつた。うれ程潔白な彼。おー私は彼を今一度呼んでみたい。けれぎも正しい彼は自分を記憶する程ろんなに執着心はないだらう。キツトもう私の様な路傍の花は當然御忘れになつて居るに違ひないわ私は一生徒だもの……。』

ここ迄考へてゐた時にうれさなく淋しい露の様な雫がボタリミ静かな茶室へ音をたてて落ちた。月はもう高く昇つて只ボブラーの太い幹や葉の繁みの間に

蒼白な夜の空間がのびかた。前の黒欄越しに吹上のお城が靜かな影を落してゐた。上品な電燈が三つづゝ路傍に輝いてゐた。折も折り八時をつぐるキリスト教會堂の鐘がガンヂンミ面も神秘的な幽寂な物思はしい音律の高い響が靜かな夜の町を流れて來た。伊楚子はハット聞き惚れた様な眼差でぢつと聞いてゐるの消へ行くを惜しむ如くに面を傾けてゐた。もう伊楚子はぢつと聞いてゐられなく悲しさが胸のすみすみまでせき上げるばかりであつた。涙も枯れんばかりに代々泣くのであつた……。

『兩親は米國に居て、幼い時分から叔父の許にあづけられて乙女ミなつた淋しい孤獨の乙女だもの。やはり私は常に異性の愛なくしては生活出來ないわ。あゝやはり私はうら若き女だもの。さうしても彼を忘れることは私は出來ない』

妾だけは……私だけは……。』伊楚子は狂ほし氣に友禪の袖に面をうづめて口走つた。教會堂のおごろかな鐘の音は未だ止まなかつた。彼女は無意識的に起き上るに急ぎ氣味にお椽をおりて——外へ出た。……吹上城のお濠には新たな潮が充ちてゐて、時折ピチャリピチヨリミ魚が水の上におざりあがつてゐた。初秋の外氣は何んこはなしに冷やかに感んぜられた。あたかも素人が初めてイブセン劇を見物した様な複雑な己の神經の爲に彼女は卒倒せんばかりに暗中に一道の光明を認めて苦しい慘たらしい己の休験から完全の自我を生かしたいと願ふばかりだつた。彼女は同性間から個人主義だか伊楚子さんの様な我利ほうの方は社會へ出てさうして獨立して事業が出来るものですかこの社會といふものは全部同情の結晶なのよ。この結晶なくば一日も現實の社會は運轉し

ないのは勿論一時だつて共同的存在には辛棒出来ぬこころ等口口に忠告せられるのだつた。されども彼女は他人の忠告は己を惑亂する何等の效力をも有せない程自信と希望に燃ゆる盛つてゐたから多くの異性間には不思議な程理解せられて、たゞす數人の異性に守られてクインの如き生活を過してゐた彼女だつた。何處もなく米國氣質の香はしい……姿がE市に表はれて海老茶の袴を初めて青年の前に散らした時に一年かゝらに幾十人の異性から交際を願望された事も彼女には一生忘れられぬ若き日の記憶であらねばならぬ、よしそれが善にせよ惡にせよ。彼女は今の當時既に熱情の女であつた。戀の女であつた。早春云はうか幼春云ふべきか全く振髪時代の太い腕で泣いた女であつた。けれど彼女の裏面には總ての淋しい荒漠とした頼りないものだつた。それが

爲めに、今の描いてゐるウエルトは、全く矛盾した光榮と觀樂によつて形造られた哲理的に進歩した人世であつた。この甘いドリームのような生活の半面を有する伊楚子にまつて、過去のあらゆる戀人をもいつはつて只彼をのみ愛人とせんとした過去廿日あまりの行動ころは、今になつて彼女の悶々の原因であつたのだ。レオバルデーはウエルトはつかれゆく苦惱のみ……たゞウエルトは讚美するなき灰のみだ云つた。それは彼女の等しく叫びたい峻しい人情や刺戟から生の苦痛から自由のユートピアに逃れんとする刹那の斷定であるはずだ……。彼女は總てが自覺的に而も自主的に所謂……自由意志を以つて自力的に自動的に生活が描き出されてゐた……。あの近代文藝の建設者の一人であるイブセン……：現今の總ての文藝に感化影響を傳へた千八百二十八年小さな諾威

に生ひ立つた彼の有名な二十有餘の脚本……世界的に傑作である處のその内に、潜在してゐる共通の主義即ち人類は宜しく人類らしく眞の生活を送るべしと叫ぶ自覺した男女を中心に狙つてゐる例へば人形の家の如く殊に女性の地位に於て現代的な描寫があるその光輝ある太陽の様な赫然たる人格者と讚美憧憬してゐる處は、如何に幽怪な程内面的に沈着な眞面目な人間としての深みを表はしてゐる……俗習なラブでなくして理解のある眞實のラブによつて社會改善を計りその社會より以上の理想と合致出現されたいと考へたのであつたその濃厚な自己主觀に立脚した眞に自己自覺から發生した止むを得ない慾望願望の爲に性格描寫をものし殊に各個性の内面的生活の描寫に一生を捧げ終つた彼、奇怪な程人生の運命を暗示した涙線を超越したそのイブセンの崇高な眞摯

なる面影に彼女はうれに……鬢髪たる處があると思はないわけには行かない程伊楚子は幼い乍らも若芽の様な可愛い現代殊に近代より以上未來性を帯びてゐる。うれに同化し得る要素のある思想と、彼女の固く形造られた小さな牢舎の様な頭腦とうれをハッキリと表現する理智的な二つの腫は彼女のまゝを明確に雄辯に物語つてゐるのである。眞柄の處作は雲雀の様な輕快さで、このE市うこいらには珍らしい時代ばなれた都人であつた。彼女は決して如何なる場合にも義理人情に自我を損傷し様はしないベツカの様な不確實な自信のない新らしい女を標榜しては居なかつた……。彼女は彼女自身が近代社會の内面的の豫言者の位置に坐して幼い乍らもイブセン的な社會觀人生觀男女觀を抱いてゐる歴史に時代に思惑されない宇宙に影を落した宇宙の色彩に浸つてゐる

こを足場としてゐる女性であつた。男性も女性も地上に落ちる影は平等な力と希望に調和してゐた。彼女は獨立の可能性を認識してゐた幼い十五六の頃から然し乍ら、大杉の眞柄に對する純潔な自覺的な何等の野心の腹藏してはない彼の一切の淡い戀が單純な精神的作用に原因した戀愛であつたにせよ、その最初彼が………忘れずまい………云つたその彼れとしての最初の眞柄に對する聲であつた事は今迄彼女が幾多の異性に接した誰れにも味はれぬ崇高な己が理想の人格者個性的な色彩に富んだものさしか思はれなかつた。

彼女はそれを低級な俗習的な戀愛とはしなかつた。その名稱に苦しめられた程何事かの靈感さしか思はれない程それ程大杉の一切があまりに清く聖く純であつた事によつて、彼女程の個性を抱いてゐる女性であり乍ら、あはれや——

……去にし日のやるせないいぢらしい殺してやりたい信聖い大杉の身邊に晝さなく夜さなく………靈は離れない様に迄、彼女は大杉を殆んさその清さを呪はんばかりに心憎くも又したわしくも思ひ思ひして悶てゐるのであつた。彼れはもう一生會はれない、自分はこのE市の片田舎で米國の母の歸る日をまつて、そして、平和な田舎の朝夕を送るのだ、己の天分はこれだけなのだ………或る時等は乗馬俱樂部へ行つてゐる時でさへ考へる弱い日もあつたが、彼女の赫々としたその個性には到底その埋れ木同様の未來、暗黒な寂寞な將來の己が生に對して、堪ゆるべくも思はれなかつた。それだといつて、彼に合はれる光明さては一條も見あたつてゐない。

彼女は彼れを神の様に天上の人として、幻に描いてゐる外は、可弱い女とし

て社會から目されてゐる人形の様な外觀をもつた現代の社會の女性としては致し方なかつた。結局彼女は悶ねねばならない破目に陥つた。

『私は泣かない。私は泣かない。決して悲しいことはないのである——。私は私自身を知らうとして悶ねる許りだ。その自身は驚く許りに聖いと思ふけれども、悶ねるのだ。未だ私は聖くなれるのだ。私は泣かない。悶ねよう。悶ねよう。そしてあの幻をつかまへて了ふつもりだ。』

眞柄は、校門を抜け出てから、ホツホツ一息ついて、四邊の黒づんだ草木の香に、うれしくなく、新鮮な刺戟を感じ乍ら、熱した眼で總ての夜のセンチメタルな情緒をにらまへた……。

濱へ行かうかお城へ行かうかたぢろぎ乍ら、繁雜な心の爲めに、その精神

の葛藤の爲めに、彼女は只ボーボー歩みつづけた……。やつと彼女は正氣付いたらしくスタスタと濱の方へ歩いて行くのだつた。世は早や秋は云へ未だ水のしたわしい陽の衰へない八月末のころで、人人は云ひ合はせた様に夜は水邊に出掛けて来るのだつた。そこには男女の肩を並べて話し合ひ乍ら、歩んでゐる後姿にも釣をしてゐる老ひ人にも濠のほとりに自家の椅子持ち出して父も母も子も召使も團扇の長い柄を握り乍ら行く人人をうれしくなく晴れやかに見送つてゐる人人の後姿にも、皆一様に幸福ささ生の觀樂ささ光榮ささに、外面を被せられて夜分は晝間には見様こして見られない詩想ゆたかな別世界であつた。彼女はこうした妖魔の様なウエルトが何んこはなしに怖いので、さうし様かこ考へ乍ら、いつの間にも、おぢけながら、可成道程のある濱迄來て了つて

ゐた。怪しく亂れ勝ちな取り留めのない戀の幻覺の惱みに、濱打つ浪みの音を眺めた時に……慄ひ上る程の物凄さに颯と面を變へるこゝ、素より言葉も出さずに砂の上に青白く烈しい衝動を感受したものの様に、彼女の衰弱し切つてゐた脳は忽ちにして平均を失つて自失して了つた。心臓は一時に爆破されたかの様に、狂ふ血の浪が傳つて來た。一昨夜からの嵐の後は、彼女の懊惱にもまして亂れ亂れて天保山の濱に打ち掛けてゐた。月さへ黒い厚い雲に没して海原も濱邊も、恐ろしい音響と亂れ吹く夜風と暗黒とに、總てを没し奪ふのだつた。大陸的な氣分のするこの濱邊は、それ程恐ろしさが深み入るばかりさしか思へない。濱の外壁の様に遠走つてゐる岡手の老松は惡魔の如き夜叉の如き相を表はして、ごん底の眞柄を浪と共に奪ひゆかせ様と浪の響きに異様な反響と雲を呼

び起してゐる。涼を求めに、濱に來た人も、いつの間にもやう姿を消して物淋しさは、慘酷な程物凄さを加へて來るばかりだつた。海原は暗黒の中に怪しく白い齒牙を向けながら、また狂ふらしい……。

沖に片帆を上げた、ボートが……恐ろしい動搖と、困惑の極致に全能力を傾注してゐる痛ましい苦闘の様が、猛獸に狩り立てられる小羊の如く、何處へ着こしも思へない、速度で、只疲勞と死滅のみを待つてゐる様な、悲慘な光景が伊楚子の眼には夢現の様に見ゆはじめた。

小鳥が……死んで行く刹那の様な女の悲鳴が沖の方にあたつて長くかすかに伊楚子の耳に傳つた。濱浪は益々あれ來た……。海原はシケを起した。

彼女の細い無感覺になつた足許へドツと怒濤が第一撃を與へた。伊楚子は朦

朧とした意識を覺ゆる様になつた。あたかも貧苦のドン底に蠢めく細民の眠りから醒めた様に……。あらゆる絶望の中から尙ほ……名譽と虚榮と……それに伴ふ虚偽に……女性としての模倣性や何かは知らぬが心に仄いて來る享樂的感情と、それによつて、償はれる空虚なる内的生活の渴慾や冒險的斷行の哲理的な思索生活……それ等俗習の一切から分離し様と伊楚子の腦裡には尙ほ恐ろしい戀愛病者としての苦惱に迷はされてゐた程それ位自己の處すべき又捕ふべき態度と光明と戀愛とに一時も自己の腦力を休養させることは出来なかつた。……而も殆んぞ没理想に等しい狂亂の現實に於て、可愛い彼女には、重い荷物であらねばならない。一日毎に俗惡な現實を彼女の目前に曝露してかく社會は幼き日に花園の花の様な、蜜の様な社會だ、水よ、山よ、と終日遊

びまはつてゐたる頃の永續を許さない。彼女は大杉と別後、初めて……俗惡な社會を覗ひ知つた……。朧乍らも……。それは不思議な程殆んぞ奇蹟といひたい位ひの儚かない、神の様な聖い或はクラシカルドラマをみてゐる様な刹那の感情の爲めに……。今迄充されぬ處か、全く空虚であつた或る何物か名稱の附しがたい弱點、或は缺乏的な不足にその成長を害してゐた……サムシンドグが彼女の健實な、眞劍的に自覺的な全部の中に或る間隙を生じてゐた恐怖すべき性的發作が如何にも名付けにくい所謂女性としての自然的病源の潜在の爲に悲觀ヒステリックな女性となつて了ふ。こんな普通の世間に共通な病源の所有者で若し彼女が若しあつたと假定して見れば、彼女はその最も不幸な判決を宣告された戀愛病者と斷言せなければならぬだらう。彼女は明言の可能性を突

破した超人類性の問題に遭遇して、而も彼女が幼い單純に老氣のある複雑の絶頂に位する初期の体験の問題、それが深み入るに随つて彼女がそれに追従して思索するに足る女性として生き様とする努力の反射的苦惱に云へば云へない事はない自覺的な伊楚子の個性の然らしむる現象も考へられるだらう。けれども又、その裡面から云ふて見るなれば、彼女程悲惨な懷疑の念に悶々たる者は全人類の女性の中に幾人居るだらう。哲學者も説く事あたはず、倫理學者もそのサムシングを捕へ得る事は不可能である。ルーテルもセツクピアも、恐らく近代の世界的戀愛哲學者を以つて名聲を博してゐるスエーデン人——あのイブセンの出たノールエー——一山脉を隔てた北歐の寒村に七十幾才の老齡を送つてゐるエレン、ケイに於てすらも到底その極致の一炎を把握なし説破立論

なし得ることは不可能だ。言葉に出だせば、幾分その階段に達する初光を暗示してゐるのかもしれないが宗教その物も現實的には實在に合致せぬ處は往々にして發見せられる——それが當然かもしれないが……、人類の生み出した宗教はその完全の域に達することは有り得ない、只それに近い觀察と臆説を立論するに過ない偉大な宇宙の原理にもこらない宗教は皆無である程無宗教的な宇宙の或る一點に人類は生存なして、低級な宗教はそれを、さもなくも威壓してゐる……何んたる皮肉な矛盾だ。されど残酷に云はうか無能に云はうか、人類の大部分は所謂世間で云ふ宗教的生活をなす程……よしそれが宇宙觀より見て低級であらうと、自覺してゐない。それでさうして宇宙を論ずる資格があるたらう諦めの人生觀之れが伊楚子にはさうしてもいやでならなかつた宗教は之れだ……

……。

人生を諦めた宗教所謂過渡期の宗教に全人類は包括され支配せられて、それ
で満足しなければならぬ。それ以上——宇宙に偉大なる真理を原理に根底
を置いた動搖なき絶対性の宗教を捕へ發見することなくして不_レ理解不可解なる
宗教殊に布教以來の長き歴史を唯一の誇りとして、それによつて根底の薄弱を
没し去らんとするキリスト教の如き我國に於ては佛教の如き——は、實に全人
類をして宗教なき古代を偲ばしむるに至るであらう。恰も無宗教の如き現代社
會思想の混濁の頂に位する際不眞面目な根底に宗教を齎した動機こそは、人
類の者の罪にあらずして之れらの宗教の物に一大缺陷の存在してゐた絶対
的惡性に外ならぬだらう。宗教は絶対性であらねばならぬ。然るに時代思想

に左右せられるのは、明白にこの間の消息を物語つてゐるさいつてよい。この
方面から云つて來れば……所謂危險思想なるものは、その絶対的惡性の變態
的表現かこゝも斷定し得るのだ。勞働も戀愛も生存も……神の恵み給へるなり。
絶対者の與へ給へる生命或は御川の爲めに無限の感謝を持つて、敬虔の念にて
その與へ給へる人權を存續發輝進化さすは之れ神への義務である……宗教家
は述べてゐる。それすら近代人は率直に信仰せなくなつて來たのは當然かも知
れない。よし信仰した眞の信者でも信仰がなければ實際このせちがらい社會に
やつて行かれませんね……百人異口同音に而も平氣に物語つてゐる……それ
が眞實にせよ、宗教的考察から論議してみれば、矛盾である、無理解である、
没人格的なのに一驚するのだ。神の恵み被惠者としての甚だしい思想上の矛盾

無自覺な事が判る。……それは弱者の宗教なのだ。生活の爲めの宗教であつたなれば、その信仰力と神の恵の力に怖ろしい相違を生じるばかりである。宗教は永久性で眞に絶対性のものであるから……。ろれでなくとも、生れ落ちて直ちに僧侶の人人でも、現今の科學文明の發見せる偉大な宇宙の眞理に覆はされぬ説教をなす中心的な宗教或は信者が、一人として出現せぬのは、この理由に基因して居ることも考へられる。世は暗黒である。世は無情慘酷でなくして何んぞ云へるだらう。一點の理解すら生命の上に與へぬ神の子は……。實に奴隸よりもよりも冷酷無慘な生である。可弱い女性にまつては、只ろれがこの上もない苦痛であつた――。

伊楚子は文學に深い憧憬を持つて居る程感情は人並勝れて病的な程鋭

敏であつた。彼女の愛求してゐるものは乗馬ミテニスミ文學の道だつた。山川の様に無教育な女性ではなかつた。されど山川の人生觀は眞柄の人生觀とほゞ一致して居た。大杉は思つた……。

眞柄伊楚子の腦奥には幼いその心には廣いその理解……。漠然としてゐながらも、潜存して自由な天地に飛び廻りたかつた、その不可解な小女心の心の奥底には、やはり自然の美を求め眞の慾望があつたから……。その花の香の中には、大杉の忘れもやらぬ髪の香頬邊や紅唇の香があるではないか……。

彼女は……。彼女の二人で、固き信念をクリエートした生活に宗教から脱退したかつた。その二人で……。クリエートした固き信念の下に生を存続したならば、現代の宗教以上に……。崇高な言外の域に達成した靈的生活以上のライフに

突き入られるに違ひない……こ伊楚子は狂氣にこんなことをうれさなく考へつゝさけてゐた。

己は美人だ……タイプも大きさも聲も肉の色も香も……總てが妖艶だ、彼女はここの様に又甘い蜜壺の中に眠つてゐる様な心情の許に大杉の男性美を比較してみた。

大杉は尾花の様な青白い中肉の脊の程よい少し而長な濃い秀でた眉を魅惑する様な……瞳が眞柄のすべての幼い幻影であつた。彼女は……又消へも入りたい程彼の幻影が戀しくてならなかつた……。ろの聖い清い正純な彼の風彩や心……ろれ等がまたたまらない程彼女の胸を掻き亂した。伊楚子はこりこめもなく空想の様な不可解な心理の爲めに頭は亂れて物凄じい濱鳴りや空行く黒雲

のたゞづまひや、沖から吹き寄せる夜風の爲めに益々怪しく狂ほしい氣分に徨ふのであつた。ろの美しい黒髪はほつれ勝ちで……ろのすべてが慄つてゐるか……ろしか思へない程彼女の姿は嵐の中に咲き誇つた一輪の花か……世界で最も強い者は獨り立つ者である……こ、イブセンは叫んでゐるけれども、ろれを眞理の標準とするのには、あまりに彼女の意志は、現實を灰色の渦中に没け入れて了ひたくなかつた。ろれに對する眞理はあれさ……。

彼女は再び地上に泣き崩れた……。彼女の胸はいやが上にも狂ひ猛る外はなかつた。淋しさは彼女の全身を包んだ……。

フト沖合から又異様な悲鳴が鋭く而も細く響いて來た。

今迄……影も形も見えないと思つたさつきのボートが又、細々浮んで見ゆ

た。伊楚子はギョツとしてろの方向に視線を投げてゐるこ、次第に近づこうこしてゐる氣配がして、男女の物凄毒々しい會話が手に取る様に邊りはばかり無く響いて來る迄になつた。彼女は急に立ち上つた……。そして、亂れた麻の様な頭で、尙ほも見詰めて居るこ、若い男が一人の藝者風の女をつれて、巧妙に濱邊を指して漕いで來るらしかつた……。

濱に直角に……ポートをブチ上げて置いて、若い色の黒い男は半裸体になつてゐる小さな藝者を小脇にかい込んで……濱へ渡して了ふこ、風浪のしぶきで濡れたらしい着物を一生懸命に絞つてかたはらの側に同じ様に坐つた……。繁々こ人形の様な女の顔を眺め乍ら、コロリと横に寝ころんで了つた。男は頭の髪の毛を拂ひ拂ひ云つた。

「お前つかれたかね。俺も随分つれぬ目にあはしやあがつて俺あこれ程お前を可愛がつてやるのだよ。風でも引いちやならねわ。なあ。おいこいつう掛けだらいいぜ……なあ。お前未だきかねわ……のかね？」こ男はや、聲を尖らせて、小さな女をかばう様に云つた。

「妾は死んでもいいんだよ。早く殺して頂戴てばさあ……。お前は悪魔だ……。未だこの上お前はさうしやうこ云つてるんだい？」

女の聲は尙尖つて居る……。

「お前は……俺あがやりたい金拂つてよ買つて來た代物ぢあねわか。お前は何んこ云はうこ俺あが今晚は自由にするだ。あまり強情張らねわでさつさこな……お前は俺あ……好きだこ云つたぢのねわか……。」

男は……懐いてゐる柔い女の手足を無遠慮になぐつた……。

「お前は畜性だ……妾やねね。心からお前さんをすいちやあいなんだよ。

思ふ様に御しな……エーこの鼻垂れ奴がさうするつて云ふんだいね……。」

女の悲鳴が……三度ならず嵐の中に響いた……。

女は——

ろれつきり死んだ様に身動きもしなかつた。柔い肩から……無惨な程……

……の状が明々々々覗かれる程不愉快な青い青い肉体がこぼれ出て居た。

……水の中へ再びシヨボシヨボ……這つて女をボートの中へ投げる様に運

ぶ……己もヒラリ……後から巧妙に飛乗つて、怒濤を乗切つて沖へ沖へ浪にさ

からひつつ、漕いで行つた……。

暗黒の海原に全く影を沈めて、もう人聲も何もきこえないのだつた。

伊楚子は現實に初めて甦つた。漸つて自己を眺めた。

砂上に圓ろく小さくうづくまつてゐたのに驚いて一目散に風に追はれて走れ

るだけ走つて濱を出た。彼女はもう涙が瀆の様に流れてほろり落ちるのを知つ

た。彼女はもう泣くにも泣かれぬ程怖かつた……。

その夜は彼女はちつとも眠られなかつた。

「K子さん。それは惨めだつたあの藝者が……。」伊楚子が眼を丸くして動

悸を制へて云ふのだつた。

「うう。怖はかつたでせう。」

「ううよ。」伊楚子は高い聲で震ゆるら云つた。

「一人で濱へ行つたの？」

「は……」

「まあ。この嵐に……よく一人で、怖かつたでせう。わたし聞いただけでもゾーとするわ。」K子は首をちぢめて云つた。

「女さいふ者も、あんなに社會では弱いのでせうか？男つて云ふ者は暴君だわね。わたし日本の男子はあれでいや。」

伊楚子が吐き捨てる様に云つた……。彼女はいつまでも沖にきこれた女の悲鳴が耳について眠られなかつた。

雲の空一面に被ひかぶさつてゐたのもいつの間にもやら失せて、窓から月が室内にもれた。

「月が出たなあ」彼女はカーテンを絞りながら、月を硝子越しにのぞいてみた。

月は清い……さこまでも、丁度戀人の胸の様だつた。

颯と吹き入る夜風は意外な程冷めて他の生徒の寢息がうれもなく室内に傳つてゐた。それは皆上級生だつた。彼女はうの姿をウツトリと見流してゐるこ、いやな一種變んな悶むが彼女を益々寂寞の底へ導き去る様にこりつき様のない……空虚と單調とが暗い空氣の中にたえず己を呪つてゐるかの如く思はれた。うれかこ云つて彼女は——舎がいやでもなんでもないのだ……。

伊楚子は恐る恐る机から彼が残して歸つた一通の手紙を取り出す玉の様な情熱の涙が青い眉から、ほつろりこしづかな手から、丈なす黒髪にホロホロこ

落ちてまろびゆくのだつた。その涙は美しい眞珠の様に、こぼれ出た膝の上にも重つたく落ちかゝつてゐた。彼女はうれをぬぐはうともせず、じつと細いベンの跡をみつめてゐるばかりであつた。

「私はあの方と御面ひした事を悔いてゐるのかもしれない。何故泣くのだらう……私は泣かない……もう泣かない。あの方もやはりこんな切ない心でゐらつしやるのかもしれない……けれぎ。」と伊楚子は胸にせまり来るさびしさに、わびるばかりだつた。伊楚子はもう眼を開く勇氣にてはなかつた。

黄金通りから吹き込んでゐた重つたいお濼の鹽風がフツト消れた様にこまつて室内は恐ろしい靜寂に甦つていつた。

「夏の夜の短かき夢と御諦め下され度優しき御身の事々、一生御忘れいたす

まじく……實に儚かなき逢瀬にて御座候ひき……。』としたため大杉のベンの跡……未だ生々しい桃色の手紙へくちづけをするやるせなさに、身も世もなく消へ入る様に伊楚子は寢臺に全身をなげかけて聲をたてて泣くのだつた。たゞ泣くより外には術べがないのだつた……うれ程苦しい……胸には、悪魔の様な眞紅の焰が伊楚子の總てを焼き盡さんとして猛りに猛つてゐた。伊楚子は全く意識を失つた様にウツラウツラと朧な夢をみてゐる間にすつかりわからなくなつた。夢か何か知らぬが……。一時止つてゐた、濱打つ遠鳴は物凄く月光を縫ふて、遠近の黒雲は足を早めてゐた。その度に地上は恐ろしい暗黒から明白へと動揺して樹末に眠る小鳥のやすらかな魂を奪ひゆくのだつた。吹上城の樹間から流れ動き初めた……讚美歌の歌の聲は聖なる神をたゞゐる信

者の聲か、花草分けてみたい……うの人の心よ。……。姿よ。歌唄ふの聲は
けに美なるものを……。何んに驚いてか伊楚子はハツミ目覺めて青白い月の落
ちた庭石や海の様な砂原を見つめてゐるが……。また眠たくなつた……。

わがたましひを あひするエスよ

なみはさかまき かぜふきあれて

しづむばかりの このみをまもり

天あめのみなごに みちびきたまへ

……伊楚子は夢の様にかすかに聞いてゐた。それはあまりに強烈な刺激であ
つた。——信者の悶もだつた……。

けれども夜が明け放れても悶もは亂れるばかりだつた。

『信者の生活！ はたして慘酷な生活だ、諦めの宗教である以上慘酷でなけ
ればならぬ。たゞへ四千年の歴史を持つてゐるキリストでも、根底の薄弱な宗
教だ、私等で造る宗教に生きたい、それ程純正な崇高な偉大な宗教はないはず
だ。けれどもそれは今の立場として實現は出來ないのだ。私はキリスト信者に
なつて神のあた、かい御胸にたよらうか、前者が絶望である場合……』と伊楚
子は徹底的に思考を廻らす時もあつた。こんな生活がいくとも繰返されて伊楚
子の快活な外面の笑ひも、何んもなく物さびれてゐるのが覗はれる程頬の邊の
肉がうけてくるのだつた。真柄はよく他の生徒に聞く事があつた。

『私はごんな人間にみわて？』

『真柄さんは快活な方と思つてよ。』

「……………外面的には、非常に美しくつて快活だけぎ、内面的にはうれは淋しい詩人だわ。」

「……………真面目な快活な方と思ふわ。」女學生達は彼女を圍んでいろ／＼意見述べてゐるのを淋しく受け流してゐた彼女の胸は、恐怖の念にみたされた。

「だから、私は苦しいんだ。」伊楚子は、ろの毎に嘆息しないわけにはゆかなかつた。又或る同級生の一人が……………下級生を捕へて、グループを作つて面自相に話してゐた。

十月に程近い或る天氣のよい午後の休みの時間で、次は体操といふのでゆつからかまへ込んでゐる氣長な時だつた……………。

「真柄さんは……………ほんごに個人主義よ。妾ね。ノートを借して頂戴云つた處がね。妾のノートはきたなくつて見られませんかよ。仰在るのよ。でもいいから一寸借して頂戴云つたら妾も見なくつちや……………ご。あなたは未だ筆記してゐらつしやらないの？ご眼を丸々させて仰在つてのよ。」面長い女學生が口をゆがめて云ふと、上級生らしい生徒が沙石を弄び乍ら鸚鵡返しに云ふのだつた……………。

「ろんな事分つてる……………あの方はうれは不品行者よ……………ね。」

「まあ……………真柄さんは随分な方よ。米國生れだものね……………」丸顔の女が黄な聲で云ふ……………。

「……………ほんごうよ。」一同が和した。

丸顔の女はまたつづけて云つた……。

『眞柄さんはね、人を何んにも思はないからよ。所謂自己中心主義よ。さんな面白いお話でも氣に入らない時には、すぐだまり込んで了ふのよ。だからあの方の氣の合ふ方は一人もないのでせう。』と言葉の終りに力をいれてグルーブの人人をみまはした。

『わ……。ろうよ。』と一同が和した。

けれども事實は之れ反對なのだつた。……眞柄はこの校に誰一人として知らぬ者もない程の美貌の所有者で殊に文才に長じて居た處から……他生徒の嫉妬を受けてゐたのだつた。神に愛せらるる者は薄幸である……。始業の鐘が……ガンガンと響く美しい彼女の姿が一きは目立つて教室から表はれて來た。一

同はハツミ彼女を見守つて美しい姿をうらやまし氣にみてゐた……而長の女はまた云つた。

『あれを御らん。あんなハイカラな靴をはいてゐるこごよ。生意氣なね。』
『實際下級生のくせに生意氣なね。』と上級生らしいのが云つた……。けれどもその女も眞柄には遠慮であるらしく面責する丈けの勇氣は無いのだつた。衆を頼る者は多くは悪だ。それから二三日たつて或る生徒からこの事をきいた眞柄は眞紅になつてほてつた頬を被ふて机に泣き崩れた。險惡な敵意の色が漲つてゐた……。彼女は宗教迄も、否定せんとしたものの、元を正せばやはり米國に居る時分からのキリスト信者であつた。神ころ、我が弱き魂ひを守り給ふ主……。弱き者は幸ひである。

金星橋を下つて川岸端を新地へ歩んでゐるこ、いつの間にか白鷺橋へきてゐた……或る夜のこことだ……。

橋の下には……十幾艘のボートが浮んでゐた。少し離れた彼方には水上警察の舟が赤い灯影に映れてゐた。

如何な運動家の眞柄も——一人ではボートに乗つて遊ぶ勇氣もてもないのでボンヤリミ橋の上にもたれてゐた……。

薄い單衣ではもう肌寒い心地がした。水のかゞやきにも、秋らしい浪の色をたゞけて、くすほつた橋板に巢喰つた虫がキリキリミ淋しけにないてゐた。くつきりミ浮き出た白い足先も指の色も繪畫の様にすべてが淋しかった。ろの姿はあくまで美しい……玉樓に咲き出た一輪の夕顔にもたまはたい程の靜かな芳し

さである。船頭町のあばら屋には色黒い大男や女達が樂し相に話し合つてゐる、ろれ等は皆彼女の艶々しい肉体ミ犯し難い氣品ミに腦殺されて居た。彼等にもやはり生の何者かを握る資格のある者らしかつた……。こんな人間味を面白いと思つた。ふこ彼女は山川民子の事を思ひ出した。ろれミ同時に全身にワナワナミなみうつのを覺れた。

「……大杉には山川のラバーがH市に居る……。」と思へば……死んで了ひない程……すべてがいやだつた。伊楚子は手紙事件の事を思ひ出した——。

眞柄の眼前にあの去にし夏の月ある一夜の事件が幻の如くに浮んでくるのだつた……。ろの手紙を想ひ出した時には彼女は喪心せんばかりに狂ほしい氣分に支配せられて、もう涙がこぼれ知らず睫毛から水面に落ちた……。

「おい……ろこいらで泣いちゃいけねわや。お前さんここは人の通る橋ぢあねわのかい。ちつこあ考へなせな。」

ろれでなくともむさくるしい貧民窟近くの事にて……色の黒い男か何處から怒鳴つたか分からぬ様にぎなつた。

伊楚子は肝のつぶれる様にハツコした。

「ハイ。失禮しまして。」伊楚子は失敬なニ齒切りをして元來た道をスタスタミ歩み去るのだつた。

「何んだい野郎奴が。わらう人前もかまはねわで、いちゃいちゃするねわ。」船頭はひさい權幕で彼女の後姿を見送つて罵つた。雲を起し嵐をも呼ぶかと思はれる彼の姿は身の毛もよだつ物凄ささしか云へない。船頭はごんな意味

で怒鳴つたのか——。

「わつちらあ船頭こころやつてもあんななわくした異人の様な女ぢあないわいねわ。第一おツてん様にすまね……。貧乏しても泣く様な事あねわ。へりで泣かれちやこつちあ死なにやならね……。うるさい。」細帯の黒づんだボロ着物ももつかぬ着物を纏つた女房が低脳らしい事を云つて男に和した。乳の邊まで露はに晒け出した女の肉体には都會では見様こしてもみられぬ……。青銅でもこねあけたかと思はれる……。力こいふ偉大な勢力が誇りがに光つてゐた……。たゞ此れが尊いのだ。彼等は力で生きてゐる——。船頭町の一角に月夜の海に橋を背景に片肌抜きすてたタイタンミ肥大な女房の影が……。地上に佇立してゐた。ろの太い頭—手—足、ろの前には何者かを威壓するものがあつた。

地上の勇者は地上に最も接近した人類の中の人類である。彼等舟人の地上は……無限の彼方に迄延々を擴ろごつて雄大な天地は彼等舟人の住家であつた。

白鷺橋を返した伊楚子は再び後を振向いてみた。橋の中心に突つ立つたタイダンの姿ころは生こいふもの、眞核な歩みを悲愴な生をヒントしてゐた。弱い者は悲しい……正義も役立たぬ。力だ力……。寡よりも衆の力だ。

……大杉や山川の事が臆氣に想はれてならない乍らもつこめて冷靜を粧つて黄金通りへ急ぐ間も、多くの男性が追従して居やすまいか恐怖の影にわかないて……やつこ——舍へ歸つた。

窓の純白のカーテンを揺がせて吹き入る秋風は、追がにつめつたくて上氣した面に心地よかつた。

外では小犬が二匹黒と白……飛石の上で齒みつこをしてゐた。自然的な情緒のする西洋の象徴劇でもしてゐるシーンの様に、變化の貧弱な局面も興味の薄い……こはいふもの、純な美のソローに魂は溶けて行つた。宇宙の靈の中へ……。

耳を掩ふ髪を透かして、タイムが單調なシーンの上に動搖し去る姿をきいてゐるかの様に……。

秋の草花の香が……全身を包んでは、音もなく、消えてゆく度毎に、深核な哀感に沈みゆくのだつた。

心やりに摘みこつた黄菊が……赤い机掛けの上にふるわてゐた……。虫の聲も木々の蔭も池の水盤に落ちる水の雫も……總てが青い。

赤い机掛の上には、カナリーが愛らしく電燈の光に映れてゐた。小さなウオツチを見詰めた儘深い冥想に耽つた……。秋の氣が骨の中まで沁み入る様に感じた。

『眞柄さん……未だ御起きなの……。』と愛くるしい瞳の雀部節子といふ一年下の生徒がフツミ目覺めて云つた。上品なアイミアイがピタリミ合つた。眞柄は何う辯解し様かミ周章てたが學生らしく云つた……。虚偽だミ知りながら……。

『今ねね。數學をしてゐてよ。』
それ以上口ごもつて怖はくて云へなかつた。

『アラ御勉強よ。あなたのやつてゐらした……。圓に内接する四邊形の相對す

る角は互に補角なりミかいふ定理はもう證明出來て？』

伊楚子はハツミ當惑したもの、逃けるわけにもゆかず……身を苛める様に云つた。

『ね……。四邊形の内角の和は四直角に等しいのですつかり直ぐ證明出來てよ。』と伊楚子はやゝ考へ込んだかの様な眼付をして節子を微笑んでみかへした。

『ごんなにして……。』

雀部はベッドの上に持つて行つた物理の本をバラバラミくつたり化學の教科書をペラペラいはしてゐた。

『先づ圓の中心Oを求めてミもかく共扼角を作ればすぐ出來てよ。』とやつミ

こで云つた。

『……………あ、判つたわ。有難う。優等生だけはあるわ。』と寢臺をギツギー鳴らせたりさへした。

『……………私ちつとも有難くないの……………優等なんか……………私……………平凡な方がうらやましいわ。平凡化した生活がなぜ出来ぬのだから。ね……………』と真柄はピクピク首筋を痙攣させてなさけな相に云つた。

『ソや優等になる方は皆苦しいつて仰在るのよ。』と節子が伊楚子の誤解をもごさうご息巻いて云つた……………。

『うんなこごぢあないわ。』

真柄は雀部の顔を頼りなさ相にみいつて呟いた。

……………その夜は、真柄にも雀部にも安らかな罪も汚れもない静寂な眠りが恵まれた。

オルフォイスミイウリデイスが——ウインナで上演せられた神秘的な一方歌劇界の一大革命を計つた野欲の結晶である——歌手ミ劇的パツシヨンの平抗的進歩差等優劣のない勢力をニウライフとする、ギリシヤアンセントポーエツトが永久のウエイオブデスに迷ひ込んだラバーを偉大な敬神的靈感或は衝動によつて冥想に感服し去るこいふオペラらしいオペラのラインにも似て……………真柄は冥界の宇宙に彷徨してゐるのだつた。

二人の可愛らしい頭と頭が小さく寢臺に落ちてゐた。
淡い電燈の光りがその上に流れてゐた——。

イラゼデーな低いコーラスがルームに充ち充ちてゐて……奇積的に調和して
ある色ミ香ミ光り……世人が初めてベラスのサン、カシヤの座で観劇した時の
……幼稚な観衆の爲めにか非難の起らない、カタストローフをみてゐる様な、
ろれも、靈火のアップしない捉へ様こして捉へられぬ生氣を見出しゆく……。

……やつれた眞柄の蒼白な面にも油氣の失せたろのつむりにも。
やがて靈火に守られて幸福な夜はほのほのこ明けてゆく。鎧屏をもれる紫の
光りに靈火は自然に彼女の身邊に薄ぎゆく。……かくて紫の光りは室全体を美
しく色取る……ろして占領して了ふ。

新らしい氣分になつて二人は起床のベルに目覺めるこ、舎生一同會合……こ
なる。神の子カトリナのモーニングブレイディングが行はれる。女生徒達は清い

清い一日を與へし神に御祈りを捧げて終る。これがすむこ、舎の朝は道に騒々
しい。紫の光りが次第に白い光になる頃には、生々した人人の面が緊張してみ
ゆる、洗面室理髮室……油やクリームの香がたよふ……。凡てが生氣を以つ
て行はれてゐる寄宿舎、ろの中に居る人人……ろの群れころは心の平和に目覺
めた婦人である。

別れて後――。

ろの話は伊楚子によつて語られた。

花やかにして悲しき物語は長く長くつきるべくもなかつた……。ろれは……
……或る事狀に追はれて……。眞柄が大杉の居るH市のY女學校に轉校した
ろの後のここで……。或る夜であつた……。

大杉は寄宿舎……の事について、面白い思ひ出を物語るのだつた……。

『早く云つて下さい。』

眞柄は可成大人びた大杉の腫をみつめて詰寄つてせきあけた。眞柄ももう立派な大人ミなつてゐた——。

『ぢあ話しをし様ね。告白の仕合ひだね。ハハ、ハ。』

『面白いわ。』

『ぢあ話しますがね。』ミ彼は一息した。

『早やく……。』

『さあ……。』

『さあぢあないわ。ね……。』

『あのね……。』

『ね……。』

『ね……。』ミ云つちやいかない事にし様ね。だまつて聞く事よ。』ミためる様に云つて——話をつぎ合はせた。

『僕。K中學ね。軍港のある。あすこの寄宿舎の生徒にうれは美少年が居たの。ろの舎にHといふ舎監が居たの。病的に同性の個性を無視しての生活を續けるHは、舎生に向つて而も食堂を出るミ直ぐ舎監室に美少年を引入れて『お前はなぜろんなに澤山飯を喰んだ。お前の食費も随つて増加するわけぢあないか』ミ威丈高になつて怒鳴りました、強迫的に慘酷な平等觀を超越した宗教的自覺のない……何んといふ暴言でせう。ろの無自覺な自我表現の罵笑すべき時

代錯誤の有様でせう。彼は常に申しましたの。「人は宜しく肉体的には野蠻に精神的には文明になれ」云。Hの指す彼方には、宗教なく、快樂なく、只欲望の満足にのみ給々として苦痛してゐるのです。それが爲めには彼の最善をつくして外部の敵に當りました。舎生に親兄弟の送つたお菓子等は一週間も尙るの上も舎監室に保留なして、腐敗した頃ほひに、生徒に惜し相に小言を呉れて引渡すのは普通の事でした。何んといふ汚れた小膽さぢありませんかね——。それよりかまだ面白かつた事があつたの——。

女氣の一人もない山腹の崖の上に立つてゐた寄宿舎を……或る嵐の夕べ……美しい一人の處女が訪れました。

女にめつたに會はれない舎生は小さく運動場の向ふの校舎の果てに見え初め

た頃から、ワイワイ囃したてました……。

それをH舎監が硝子越しに猛獸の様な下劣な瞳でヂツミみつめてゐるこやはり女性でしたので、突然の女性の來襲に彼は周章して、袴をはいたり鏡をみたりして、めかしてゐました。外は嵐です。

疾風一陣雨を巻いて降り來る灰色の外面を純白のバラソルに包まれた可憐の小女が次第に近づきました。

骨も折れなば折れよ魂も奪はばよし、胸の焔の絶えやらぬ間にたわやらぬ間にミ電光閃々とした凄慘の地上に危くもろれミ感んじた美少年は雨中を一目散にグラウンドの中程迄……たすけにまゐりました。

戀人の手に胸に、代々ミ泣き崩れた處女の姿を舎監は後からみてゐたのでし

た。

異郷の空に生死の境に往來して、運よくも戀人の手に救はれた小女は、美少年の腕にかゝられて夢現に寄宿舎の彼の室に運ばれました。今までワイワイ云つてゐた舎生も接近した時には皆すまし込んで紳士振りまして、同室の生徒も、不きように感激の餘り、赤誠を籠めて看護しました。その爲めか一時に氣分が恢復しました。が意識は朦朧として歩行は到底不可能でした。

凄じい嵐は——窓硝子を破りましてカーテンをベリベリ云はせたのでした。木を倒し家を覆したのでした。破壊された窓から、砂石を捲き上げてゐました。その時でした。H舎監が扉を蹴つて威高に美少年の室へ這入つて虫のすかない顔して凝視してゐました。

悪魔！夜叉は來ました。猛獸の如きHの姿——。近づく呪はしき手——。

「誰れだ女を引入れた奴は。嵐の夜に。」

舎監の眼は悪鬼の狂ふがやうに輝いてゐました。

「たれだ早く白狀しろ。」

「——」

恐るる極みの恐しさよ。

沈黙の静かさよ——。

さればころ……さ處女は赤い唇を開いてかすかにさゝやきました。室一杯に男學生がドヤドヤ群らがつてゐました……。

「妾は田舎からラバーを訪ねて参りました。私はしゅうさんに守られて天國

に参ります。』

ストームは白く夜の外に狂ふてゐました。

大海原に乗り出したきせんの様に……。

一同は同情してすすりなく聲が男學生の間に傳りさねしました。

『先生御願ひです。今夜だけは舍で命を救つてやつて下さい。』と美少年は歎願しました。

『お前の戀人なのか——。』

『ハイ。』

『馬鹿者ツ。ハイミ返事をする奴が居るかツ。』

再び舎監は血相變つて嵐に家も倒れよと胴懐ひしてわめき立てました。水ぶ

ごりの日はぎんな氣で云つたのか……。

『でも戀人なのが何處が悪いのですか先生。僕の親の許したラバーが……。』
ごいふのを小女は眼で止めてゐました。

戀人は迫り来る胸の鼓動の爲に、口はうはすべつて云へませんでした。手は
わなわなこふるひを帯びて、周圍に取かこむ數多の生徒の眼は異様に光り合ひ
ましたの。灯影の下の痛々しい處女の病める姿は、慘めな程蒼褪めるのでした
——。

『先生ツ——。』と突然何物か、爆發でもしたかの様に洋服の脊高い男が叫び
ました。

『なんだ……。』と日は冷やかに而も荒つほく云ひました。

『先生ッ。』と又後の誰れか、叫びました。

『さうしたさいふだ。もう就寝時間まで十五分だ。皆歸れッ。』

『病院へ電話をかけさせて下さい。』と二三人が合せて云つては首をつツこんだ。

『静かにしろ。何んだ。今云つたの高田ぢあないか。お前はさうしてろんなにあばれるんだね。』お前はやはり、以前云つた事を忘れたんだね。』と語尾を揚げて肩をろびやかしました。

Hは早稻田大學の師範科出身で國漢の教諭だつたのです。がK中きつてのきははれ者で彼の一言は猛獸の叫びよりも運命的に殆んど絶對的な感念を抱かせる威力があるのでした。

彼の慘忍性を帯びた眼光にこままつた者は、殊に美しい少年に……は、誰れ彼れの容しやなく、皆運命づけられて了ふのでした。だから小雀が鳶を恐れる以上に怖はがつてゐました。ろの僻せ彼れは、驚くべく貧弱な、智識の所有者でありました。彼は常に生徒に威壓的に教師としてのパワーの下に、平凡な醜男を教育するのが目的でした。彼の前には三十年も四十年もの昔の思想が……ぶらついでるたのでせう。或る時でした。

Hが流行感冒におかされた事がありました。ろの時には全校生徒一同ろの全快せざる様天に祈り地に禱つたものです。されど彼の唇は未だに濕りが上るべくもみへず、コッコツコツ生存の爲めに教育家を標榜して居ました。ろの彼れが——高田さいふ快男子をキツミ憎くらしくにらまつた姿は、實に怖いものでし

た。高田はうれなり、小さくなつて廊下へ飛び出て己が室へ走り歸つて、丸くなつて、床の中へもぐつて了ひました。

「戀人であればこそ。戀人であればこそ。この嵐の夜に……。あ、無情だ……。」

美少年は齒をぎりぎりこいはせて悶れたのでした。

「泣かないごよ。少しはよいの。」

小女は戀人の涙をハンカチーフに受けてゐました。

「少しはよくなつたのかね？」

「よくなつたッ。」と周囲の學生が叫び立てました。氣のきいた坊つちやんが水をコップに入れて持つて來ました。急に話聲が室に起る様になりました。

「ア——水。水だ。」とろの坊つちやんが口元へつきつけました。

「水だよ。飲まないのかね。ほしくはないか。」と戀人は頬指して申しました。氷の様に冷へてゐた小女の頭は、次第に温かい血が浮んで來たらしくありました。

額にあてた生ぬるい手拭からボタリと雫がわけもなく悲し相に戀人の白い手に落ちて居ました。戀人はうれをみてゐました。大理石の様に固く緊張してゐた肉体が、だんだんに、ゆるやかなゆるみと線と色をつくつて參りました。もう大丈夫だ。美少年は考へてゐました。ろしてぐつたりと頭を項低れて申しました。且はもう居りませんでした。

「諸君實際僕は濟まなかつた。僕は退校してでも潔く諸君の汚名を雪ぐから

ねわ。明子が生命を取留めた以上、勇んで退校するよ。明子がよくなつたのも皆諸君の爲めだ。僕はH先生を決して悪口はしないからね。』と熱した戀人の言葉は低い乍らも鐵よりも固く重たかつたのでした。小女は今更の様に泣き入りました。ろの涙は熱湯よりも暑くありました。

『馬鹿を云ふな。君。僕等だつて人間だ。君等の純な心は尊いものだ位は承知してゐるよ。H先生には僕等から代表を出してうまく、内々ですませて戴く様盡力するさ……ねわ。』としのうさんの隣に始終居たKが云ひました。しのうさんは慌て、ろれを遮ぎりました。

『アツ。君ッ。然し僕はもう決心してゐるのだ。明子がたすかつた以上嬉んで退くさ。僕は笑つて退くよ。』

『なんだ。馬鹿な。こんな事は普通ぢあないか考へて見給へ。君はさうしてゐるのだッ。前途有望な君を……の犠牲にしたくはないさ……。』

『若しろの時は——?。』

『心配せんでもいい。野蠻人同様な人情知らずのHのビールの奴——極力排斥するんだッ。』

『ろうだ。ビールの奴を袋たたきにするんだ。道德觀念のない無人格者をたほすのだ。無宗教な教育者を滅すのだ!。』とろの隣の男學生が和しました。

何んこいふ矛盾の甚だしいことでせう。自由の天地につばさを擴けた小鳥がしばし雨宿りを戀人の居る寄宿舎に死を決してまでも田舎からはるばる——求めたものを、否定するこは、全く牢獄ですゆわ。ろれは死の幻影たる生の殺

奪者でせう。若者の魂の破壊者ですよ。

再び嵐をまつ野邊の二輪の花の様に……。今日も散りゆく姿でした。

夜の夜は戀人三明子は別室に宿りました。夜は嵐に明けました。

ボブラは碎かれ土塀は破られ無惨にも花園の花はむくろだにみねませんでした。見下す二河の河は矢の如くに、奔馬の狂ふにも似て濁流水煙を上げて飛ぶが如き流れが二人のほんやりした薄ろいだ眼に映りました。灰が峰の彼方には深い白雲がかゝつては晴れるかと思はれました。平和の朝間——。町人は争つて、川端に集つてゐました。

ろの時には——小女もろの戀人も全く別人の様に快く恢復してゐました。

されど——あの山の中腹に建てられた寄宿舎の舎監室には時ならぬ嵐に又も

や悲惨な争闘は開始されてゐました……。

あはれな男の群れです。彼等はかくして生活の道程をいろいろでゐました。彼等の個性は無自覺のまゝ、撈り取られ、のびんこする若い希は、いつの間にから奪畧されてゐる彼等は、奴隸にもたごへ様、動物にもたごへ様、迫害と侮辱に甘んじてゐるのでした。

今ころ……彼等の蹴起奮闘の時でした。

代表者一名舎監室を訪ふて——この闘入事件は内々ですませて戴く様歎願を決行するのでした。

「本人を呼び給へ……。」

いはをの様にHは動きませんでした。

「先生今一度申し上げたい事があります。」

「さうしたさいふんだ。云つて見ろ。」

「僕は彼には罪悪は毛頭ないと思ひます。僕は同情の涙が出る許りです。」

「僕もさうです。先生は何故つみだに仰在るのですか。」

且は暫くして笑ふ様に云ひました。ろの聲は冷やかでした。

「ろんな事の判からぬ君達かね。早く歸つて勉強しろ。本人を呼んで呉れ、
ばいい。」

遂に二人の代表は失敗したのでした。さうさうろの夕暮れに一つの荷車が舎
から淋しげに夕陽を受けて流れる様に音もなく出て行きました……。

小女の明子と美少年の修一は……さも心地よけに、呪はしい舎を振返り乍ら

ファンミ笑ひ合ひました。

「お前様これから——何處へ行くだ……。」「ご荷車轆きがボンヤリ遠慮深く問
ひました。」

「已れかい……エス様の導く國へ行くさ。ね……明子。」

「は——。ろうだわ。」

明子も輝かしい瞳を向けてほ、わみました。

「あ——エス様は知らね——だ。楽しい國だらうな——。」

「夢の様な國ですわ。」「明子が笑ひました。修一も淋しい笑ひを洩しました
。

——恁の様なテールを思ひ出して大杉は何んもなく淋しきライフを胸に盡

いて眞柄に話した。

『ごちらが勝利者でせう。』伊楚子は炬燵に顎を埋れさして子供らしく問ふた。

『さあ……それは宿題にして置きませう。』哲也は笑ひながら云つた。事實であつたか知らないけれど。』

『ううだわねね……。』伊楚子は頭點いた。

別れて後——の物語は伊楚子によつてまた續いて行つた。それはこうだつた……。

ろこはかきなく木の葉を吹いてくる秋風が、うすらさびしい夕陽の落ちた寄宿舎の庭で只一人ボンヤリミバイブルを讀んで居た伊楚子……。

新らしいベリーフライフへ旅立つ幼い伊楚子の胸は、今更の様に躍つた。
幼き信者——忠實な僕——。

花やかな自由な堺境までも極めゆくかの様な個性の輝やかしいブライドを感じますまで、まざまざと神の愛は伊楚子の淋しいハートにヒタヒタミ打ち寄せて來るのであつた。信仰生活——信仰生活——伊楚子は幾度も繰返し繰返して歡喜の奉仕に於てラブミいふものを見出した。その度毎に神ミいふものを自分には愛し得るだけの品性の所有者であり宗教的に救はれる價值がある。今更の様に宗教上眞劍に自覺しないわけにはゆかなかつたばかりか、それによつて得る眞實な祈りによつて、今迄嘗つて味つた事のない清い男女を兄弟姉妹の如くに交るこゝが出来た。そんな生活は伊楚子にミつては勿論幸福であらねばなら

ない——けれども伊楚子は信者として、は未だ幼なかつた。伊楚子は胸の底からムズムズ起きてくる悶々らしい或る考へには、地上の總ての實在が幾分なりとも神の國の面影を宿して居る事や、地上の言葉も美しい天國の言葉に喟喟たらしむる事等を念想して憧憬と理想の過程に於ける幸福な異國的な聖い麗艶な神の國にのみ憧れるるの神に近い信仰生活の中も、時として、頽廢の精神に墮落して貧弱な慾求に地上を讚美するのだつた。ろんな暗黒な世界……それは如何程罪淺い罪惡にもせよ……ろんな生活を恐れ恐れてゐる一瞬間はもう眞の信者ではなかつた……。

伊楚子はそれを明らかに罪惡だ神の國に行く事の出来ぬ哀れな偽善者の一人に外ならないと知つては居たけれども、己が負ひきれぬ悶々の爲めにつみの爲

に、エスに告げた誓ひの言葉ころは十分知悉して居たけれども、やはり伊楚子は幼なかつた——。

愛と戀との區別すら判からない伊楚子ではなかつた。然るに伊楚子のミリの急變は豊艶な愛欲に浸つて行く聖徒の自由な、一面放棄な……ウエルト——ろれも神……の、甘美な心靈的教化の道德的觀念に基因した理解は伊楚子に又一つの暗示を下したのであつた。

………晚秋に色映いた紅葉の繁みに赤々斜影が流れてゐた。丁度伊楚子が通つてゐたE教會の夕べの鐘が高くガンギンと鳴り響く土曜日だつた——。眞柄は、燦川安夫が……白線を入れた高等學校の生帽をかむつて自分を手招いてゐるのにハツミ胸を躍らせて暫し物影にかくれながら、瞳をすかして見

詰めてゐた。

たしかに自分の姿を見て呼んで居るのだと氣付いた時に一時に全身は燃ゆる立つた——。伊楚子はいろいろで髪を直したり帯を結んだりしてたぢろんでゐた。

樺川は此方にやつて來てゐた。ハラハラと彼女の小さな胸は躍るのだつた。

蒼社川の廣々とした清い流れにも堤を被せた松の森にも——赤々夕陽が樹間を染めて金色の水面もたまに様のない程美しう川口の眺めは世間を離れた雄大な自然を感じせしめる風景であつた。

漁船が沖の方から、群れて港へ港へ平和な追風に歸り來る頃だつた。

高繩半島の一角に美しくも恵まれたこの自然は、實に天下の絶勝地でもいふべきか文學的情緒をうろろ異國的な氣分に浸る事の出來る——E市は人口

こては四萬に止まつて居るけれど後に遠く……S山脉をうばだて、扉の如く燧灘から吹き上げる颯々たる金風は何事かを囁いてゐるか疑はれ、幽麗なすべてこのこれ等の抱いた微妙な風光魅の内に——今しも夕陽は矢の様に、數多の殘光を堤の森に投けてゐるのだつた。うの森は美しく色ざられて老ひ松の太い幹や——小鳥の羽を赤く赤くのめりうめてゐる——。

うれよりももつともつ艶々しい眞柄の綠髪は夕暮れの水面に優しい曲線を畫いて落ちてゐた。うれと妓んで坐つてゐる白線の男學生は……。伊楚子の白い手を固く握つてゐた……。

伊楚子とは同郷で而も小學校當時からの友人であつた……。眉目秀麗な一青年で同じく二人は乗馬倶楽部の會員であつたし、またテニスマッチやE教會等

でも——度々無邪氣に交際してゐた兄弟であつた。

至極溫和な脳髓の明哲な而も異性に執着し悪性の體驗のない淡い影の彼であつた。

二人は不思議な程理解し合つて居たものゝやはり幼なかつた……。

燦川安夫は涙乍らに御祈りをした事もあつたけれど、發動的情绪に苦痛を覺ゐたのに外ならない貧弱な信者であつた。永續のない御祈りはろの人をかへつて迷路に彷徨させずには置かなかつた。

堤の二個の影が水面に小さく寫つて居たが……空に星が落ちてからは只薄黒い夜の帷りに包まれてゆく外はなかつた。

S……………

…山脈の方では星がかすかに飛んでゐた。——相寄つた二個の熱した魂は今

宵限りミ叫ぶかの様にふるひおののく——。

破れた小倉袴に荒い緋を着た燦川安夫の男性的な……活氣のある姿や色黒々々眼光の鋭い彼を見入つた時に、彼女のうるんだ太い瞳には、ろの蒼白な頬の邊には時ならぬ——赤い血潮の高鳴るのを覺えずには居られない程……早鐘を打つてゐた。チラツミ横顔を捕へた時に……。

『——では燦川さん。わたしの様な女でも妹として……?』ミいつもに變らない口調で胸をいらだたせ乍ら伊楚子はたねかねて、夕暗をすかして彼を見守りつゝ云つた。

燦川は枯れた莖生をむしり取つては所在なき相に川へ捨て、ゐたが、嬉しさにふるゐた聲で云ひ返した。伊楚子はちつミ見守つてゐた。情熱に光るここ

のない冷やかな彼だと思ひ乍ら……。

「清き神の子にして自由に遊びたい爲に、私は貴女を只一人の妹として永久に交りませう。僕はそれ以上貴女を愛する事は罪惡なんです。」と燁川は熱した吐息を幾度もなく繰返してゐた。

「によございますわ。あの清いつきる事のない無限の神様の御許で物語りませう。……大工の子にしてナザレに生れ給ふた後、汚れた我々の爲めに生命を捨てたまふたキリストの無限の愛によつて、私共の靈的報酬を感激と感謝で……。親が子を愛する如く眞聖な愛慾の爲めに生命を自覺して、靈肉に愛なき死を憎惡するよりは限りない生命の爲め愛を私は欲して居るのです。燁川様は未だ眞の愛を御存知でないのですわ。……それ以上愛するこゝは罪惡だ

……こ、仰在いましたわね。それは何故でせう。貴郎も御存知でせう……
……ホラ、馬太傳の——カヤバの法廳の神の偉大な量域の愛のひらめきを……
ね……。私等はわが神が萬民の罪を救ひ給ふ爲に十字架に血を流された——

——その愛心を想ふ時には、初めて愛といふ字の意味が分りますの。そこには些の罪惡をも生じないと思ひます。その心……その魂は、もう私の胸にはみちてゐます。キリストは申しましたでせう。……兄弟の爲めに生命を捨つべし、
こねわ。……あゝその言葉こそ、あの御心こそ憧れて居るものなのですわ。

これ程愛といふものは久遠な生命のある……犠牲の伴ふもので、一時的な發作的な利害關係等の爲めに消失し去る様な、根抵の薄弱な無味なナイーブな輕薄なものを意味なして居やしませんでせう。それには必ずや尊い何人も批判の

可能性を超越し終つた一つのライン——犠牲の精神といふものが潜在し活動の動力となり、それによつて、初めて、愛の光が発輝されるのでせう。只今貴郎の仰在つた通り。……この魂ひこの心で……。總ての實在を肯定し……愛の御國を……天國の廢墟である地球上に、この貧弱な吾地上に、建設致し度いのです。その理想は……私の爲には勿論冒険です。けれども……愛といふ言葉の理解された信者には、さして危険であるとは思はれぬ道理でせう。私はこの魂が、この心で一人の清い妹として貴郎を兄様と申すのが、恥ずかしいのよ。それ位ひわたしは幸福に思つて居ますのよ。」

……
眞柄は、ほてつた頬を軽ろやかにぬぐひながら、黙つてゐる燦川安夫の——

——卒直な溫和な色黒い顔を今更の様に眺めてゐた。短かな沈黙が總てを支配した……。

「あ——左様です。貴女の仰在る通りの幸福は尊い魂の結晶です。」と調子はづれのした聲で燦川が答へた……。

眞柄はでもその簡單な答へが無性に嬉しかつた。今こう二人はあの現代思想の先驅と目された英のブレークが云つた言葉——自由の歌に活ける者總て神聖なり……、さいつた心身の自由に燃わした靈の生命に目覺した崇高な或る偉大な絶對的な力に燃わした靈の生命に目覺めた崇高な或る偉大な絶對的な力に燃わして居るのだつた——。

「わたし今夜のこころ……一生忘れないわ。幸福だわ。未來も過去も總てを忘

れて今夜いふ今夜のこの語りひを永久に記念して置きたい程私の胸は、かぎりなき神の愛におののいてゐるのよ。なぜならば神様は私共をこの美しい森で……この川邊で……この蓮生の上で……會はして下さつたのですもの。森の色も蓮生の香も水の深みも、小さな石も木も皆神様が恵み給ふた……愛の化身なのでして、ろのヂャンテーな瞳よ、すがたよ。……お、私は一人でもいゝ。淋しくてもいゝ……』云ひ終らぬ内に彼女は心からのお祈をしてゐた。惨酷なる生に影を宿したあはれな人の子の信仰の道にいろしむ聖きバーチンの胸よ。

計り知られぬ涙は……胸を壓して居るものを。さらでだに淋しき異郷の空の語りひなれば。

「僕と共に歩み行くのぢありませんか？」

燁川は眞柄の肩に靠れる様に寄沿つて云つた……。

「でもわたし——孤獨なのです。いつまでも——神様と共に私がい

ふ私はゆけごも、私いふ私は孤獨なのです。私はそれが爲めに悶々してゐるのですよ。」

「何故ですかね……。僕に打明けて下さい。」いふ聲は優しかつた。

燁川は全々眞柄の聖い美しい自己に對する献身的の愛を自覺せないわけにはゆかなかつた。

されぎろの美貌に艶麗なる容姿……總てが現代的の粹を集めたかゝ疑はれる天女の様な伊楚子に深く接する事は……社會の風波に不順れな坊ちやん育ちの

燦川にまつては危険視されないわけにはゆかないのだつた……。

透徹した自己に對する理解は返つて燦川の胸奥をミ、ろかすばかりだつた。非難の點の揚げ處のない美しい評判娘の——彼女と交際する事は、信仰上の交りとはいへ自己の貧弱な肉体を考へた時に、燦川は思はず我れと我が身をわななくと慄わさすのであつた。

『いゝね。うれ許りは……口に出されない程の胸の悶なんですものね。この悶を云ひ表はす事が出来ればもう——ミつくの昔に燦川さんに御告けして了ひますわ……。』

燦川の面は——ありありと恐怖の色に充されて不可解な發狂染んだ言葉にろろ身の毛もよだつのを覺ゆるめた——。

自分は眞柄に愛される柄の男子でもなければ……ろんなひまはないはずだ……。ミ、聯想に耽けるに足る、長い長い沈黙の中を——時は流れてゆく……。

折からの灰色の周圍に包擁された花うるはしき女性の姿よ……。

沈鬱なヒステリカルな時の姿……。

去にし日——。

南歐の地上に……花と咲き出て……灰色夫人と、うたはれた……スト

——ク夫人の情緒の發露か……。

眞柄はたわられぬ悶々に軽ろくほ、ねんだ。

五分たつた……十分たつた。

然して二人は一言も云ふ事は出来なかつた。

無言の儘で聲すら枯れた草葉にすだく虫の音にき、浸つて居た……。

がうれもやんだ……。

恐ろしい沈黙の内を衣を掠めて一葉、二葉、死の影は地上をたたいてゐた。

ろの中を云ひ合はせた様に立ち上るこ明るい濱邊の方へこ夜寒を覺ゆ乍らも濱風にあたるべく森道をたぎつた……。

『あの川水の海水ミブチ合ふ邊まで行きませう。』こ眞柄が先にたつてゆき乍ら優しい聲で云つた。

『あすこで少しいこひますか。僕も明日曜日の午後には松山の下宿へ歸るん

ですから……。』こ燦川は……。驕奢な程柔味のある伊楚子の後姿を追ふ様な素振で切々に云つた。

『アラ明日午後松山へ……。ぢあ今夜限りね。』

過ぎし夏の思ひ出をくりかへし乍ら……。餘りに冷淡であつた燦川に對しての仕打ちや大杉に對しての……。蜜の様な情熱の戀、うれも燦川をきらつての事ではなく、私立の空氣を吸つた丈うれ丈世間順れた處世順れた……。而も理智に燃わた大杉の愛情の濃やかな夢の様に儂かない記憶の彼れこ、ろの野心のない神様な魂の奥底があればこころ、燦川の常に引込思案勝ちな消極的な世間順れない……。異性を理解し得ない上に、永久を口の中で祈つてゐる信者——うれも一時的な病的な精神作用に起因した行動……。女性を一階級下等動物視してゐる

燦川の……には、大杉の比ではないけれども、この點が恐ろしい呪はしいラ
井ミミしての罪惡であればこそ、伊楚子は只無言の裡に歩んでゐた。二人かド
ツカミ腰を川口の砂濱の上に落した時に……燦川は思ひついたさういふ風に眞柄
に云つた……。

『眞柄さん。あなた……近頃大變心配事でもあるのですか……顔色が悪い
様ですが……。』

眞柄はハツミして燦川を視上げた。二人の視線はピッタリ合つた……。

『……もうろんなこと仰有いますなね……。つみだから。わたしもう失禮
しますわ。』

『御免なさい。僕の言葉が悪いのでせう。ね……。』

『いいね……ろんなことはありませんことよ。』

『御免なさい御免なさい。』

燦川はうろたわて眞柄の袖を固く握つて泣いた。

眞柄の棒の様につつ立つた細長い姿は妖麗にも悪魔の如く……燦川のうろ
んだ瞳に宿つてゐた……。ろれミ同時に、彼の頭腦には……。或る夏の夜チラ
リミミ大杉哲也の姿が幻の様に思い浮んで來たのだつた。

されぎもろのこころをさうして、殊に信者たる彼女に女々しく自己を没脚した
言動に出られ様、彼れはいつまでもろれを自己の胸奥に秘めて置かねばならな
かつた。

燦川は眞んから眞柄の移氣を心憎く思つてゐるのだつた。今ろの失戀に等し

き涙は彼女の目前に流れてゐるのだつた。彼女の冷や、かな澄み渡つた太い瞳には、ろの涙が心嬉しい程惨酷性を帯びて映つてゐた……。

『真柄さん。僕は、僕は、ほんごに淋しい孤獨なのです。貴女は未だ僕の心が御分りになつて居ないのです。僕は貧弱な肉体の所有者です。けれど僕は熱い魂があります。』

燦川は運動家に似合わない熱い熱い涙をハラハラと流すのだつた。

『なぜなくの。あ、許してね。私ほんごにあなたと乗馬倶楽部へ這入つたのが口惜しいわ。わたしほんごに罪な女ですわ。わたしも貴郎も重い十字架を背負つて居るのです。』

『……それは判つて居ます。真柄さんは僕に御かくし遊ばしてゐらつしや

る事があります。きつごあります。僕はろれが訊きたいのです。私は今迄真んの友として、この淋しい人生の中にも光明を抱いてゐました。ろれにろれに昔もすべてを忘れて……貴女はいつはりをしてゐらつしやるのです。』

『いやですいやです。わたしろんなに問ひつめられる理由はちつごもございけません。ろれは何かの誤解です。わたしはもうこれで失禮します。ね。いいでせう。いつまで居てもつまりません。ちつごも真面目な御話を遊ばさないのですもの。わたしはろんな弄物ぢありませんごよ。わたしは如何にブアーなヘツドの所有者でも、貴郎の仰在るご位は判断出来ない事はないと思ふわ。失禮ですけれご……。あ……胸が痛いわ。胸が痛くなつたわ。』

真柄はやはりつつ立つて動かない燦川はろれでもちつごしてシヤガンで居た

月が出た。

海原の彼方の水平線上に、暗を破つて洗ひ出された。

あゝ……………。

物思はしき下弦の月……………。物凄き月魂……………。

二人の影は砂濱に長く短く落ちて男の白線の帽子と女の佇立んだ織々たる容姿が美しく書き出されてゐた。

月の出た爲に話はこぎれて了つた。

『ア……………。真柄さん。真柄さんぢあなくつて？』こいふ聲が直ぐ後の森中から傳つて來た。

二人はギョツミして等しく後を振返つた。

それは真柄さんは同室の雀部節子こいふ女生徒だつた。

『まあ……………節子さん。』

真柄は一時に欣びを發した様な聲で呼びたてた。

『わ……………。』

それは確かに雀部の聲だこ思つた時に、死の手からのがれた小鳥の様な甦生を感じない分けには行かなかつた。

「……………こちらへいらつしやい。ね……………。遠慮はいらないここよ……………クリスチャンの方なのですよ……………」

彼女はやつきになつて手招いてゐた……………。美しい聲で……………。

『ぢあ参りますここよ……………。』

雀部はかすかな聲で答へてスタスタと繁みの中から抜け出て濱へ下りて、近づいた。

眞柄はやつと安神したらしく熱い涙が久し振りて、一滴二滴……ポタリと地上に落ちた……。

こんな事があつて数日後眞柄はやつと雀部を正しい道に導いたのを機會に意を決した。それはこの思ひ出多きE市を立ち去つて行く事だつた。

何處へ行かう——。

眞柄は乙女心に無限の空を睨まへて……雨上りのしめつた黄金通りを歩んでゐた。

ろの側をやせた小馬が首をうなだれて重い荷車をひきつつ過ぎて行つたぎり

人一人さして通らなかつた。

晩秋の丈高い雑木が道の傍に茫々生れてゐた。ロシアの社會劇でもみてる様な……悲惨墮落ろれから現實に救はれぬ破られゆく哀れ青青の花やかなる空想……ろの現實への反抗的自覺を諷刺する徑路に立つたカチユウシヤにも似て——伊楚子は絶望破滅の軀をひつさけて尙ほも地上を歩み行くのであつた。

かなな月になつてから、めつきり月夜が多かつた……。

野菊咲く岡に、月見草香る濱邊の岡に、さては儂ない詩人を思はせるすくすく……のびやせたコスモス咲く花園にたわやらぬ淋しささささつろさきに、みたされながら幾日さなくメランコリーな夜は消れて行つた。

ほんまに秋は孤獨の小女には、淋しいものであつた。

彼女は幼き日の両親とのうつしねを本箱から取出して、みれをみいつては泣く夜もあつた、淋しく窓の水色のカーテンを揺つて、水のように流れ込む秋風は……、眞柄の胸に觸れては永久に癒われない惱ましい痛みをきざむ様にも思はれるのだつた。

『己に克ちて日々々の十字架を負て従へ……。』こは、信者の進むべきロードである。

未だ未だ……十字架の苦しみに較べるならば、己が心痛は、殆んど比較にならないものだ。現に求める歡樂平和……それ等は、眞のフェースの賜物とは思考出来ない程淺薄な惠物で、キリストによつての光榮の生活歡樂の生命の把持

者たる信者が歩み行く道ころは……地上に我が孤影を讚美し得るものであるはずである……。

彼女はM牧師から導かれたこのワードを、忘れるこは出来なかつたけれども、ゆわしれぬ涙は自然と何處からもなく湧き出てつめたく頬を流れ落ちるのだつた。

『暗路を行くこも、疑ひもなく嵐の内にも神に任せん……。』こ歌つてゐるこ……一人ただ一人……。

このウェルトに歩み居る靈の幻影、その信者がいつやの白鷺橋の巨人の姿の如く……誇りがに生の歡喜の念に燃わした様……己が姿を幸福氣に眺められないでもなかつた。米國樂天詩人フウ井ットマンの言葉……。

「如何ばかり歩み得るか！無頓着に鐵砲の筒口に進むは——斷頭臺に上るは——實に神なる苦みの喜び！」——ろの大膽な思索、微妙な音調ろの躍々とした勇姿を偲ぶ時は、慧しい眞柄の脳裡にも……不思議な胸の災を打ち消すに足るものさ、偉大な磁力を感じた様にさりこて……立つ瀬さてはわからぬ……肉眼界の總ての實在を肯定した如き蠱惑の渦中に、じつこして居るより仕方ないのだつた。

全々自我の存在を肯定否定する能力の缺乏した貧弱な……人類にはろの局部に精力を集中没頭すれば、ろれ丈自我なるものを肯定なすこするも、狂人染み化し所謂卵をかはむぐ爲めに破壊し全く使用又は服食出来ないのこ同義で益々自我から……遠ざからねばならなかつた……自我は神である。

ろれは……。時計の諸機械を動かす人類の智力の存在を認識し得るものは人類のみではないはずである。時計に生命を恵む或るパワーの所有者は偉大な者であらねばなるまい……人類にも一樣な脳髓を恵み生命を吹きかけ各個人性をクリエートなし給ふパワーの所有者は偉大な者であらねばなるまい。

ろの不可抗力のパワー……絶対性の愛のパワーろの實在を肯定して人類は自我さいふ者を發見認識せんこしてゐるのだ……それが神ではあるまいか？。

時計の諸機械にも等しい脳髓もろの構造は精密を極めるこも——やはり靈の幻影である……ろれこ、好立し假設した肉体さいふ名稱の者に過ぎないのだ。

何處かに時計のネジをひねくる者……處……が存在するはずで、何處かに人類を運轉支配する絶對的……永久不變のパワーなるものの存在を肯定せないわけには、ゆがなくなつて来る。それには違ひない。

地上の總ては生きて居る活動して居る、生命を以つて絶えず永久不變の運動を永續して居る。そのパワーの根元は化學者の口に出す引力關係でも肯定出来ない。全くゴッド……神の力廣義の自我の表現であるべきはずだと思つたその幼い心の信者にも一道の光明に生き得る事を認知してゐた。

天地のロッドである神は、總ての者に生命と氣息と萬物を與へ給ふ偉大な力の所有者なる我々の養ひ父であるのだ。その永久不變の聖靈の賜……限無き生に總ての實在は存在して居る。この幽遠な魂——の流れこころは讚美の流

れ……感謝の潮であつて、眞にその潮流に、安息ふものは救はれた者……幸ひな天國神の國であるべきはずだ。そこには國家はない……人類の道心無き靈に飢ゐた争鬭それから興亡全く表面的な低級な肉眼戦は存在して居ない……。

彼等の領土は共有である。富源は平等に分配され……確實な靈の生存權は各自認識し合つて、相ひ寄る魂ひの前には……全く富貴貧賤の差等優劣あることなく……、悪しき者にも善き者にも等しく雨を降らし日を降らし給ふ神は……實に——洪大な無限な愛の所有者である。その愛は人類のみならず……同じく魂のある禽獸に迄……。

小鳥が……神から恵まれた優美な黄金の羽毛を朝風にそよがせて……蒼社の清流を見下して……細松の小枝で、彼女の小さな雛に食物を與へて哺んで居た

あの尊い麗はしいの魂ひ心。自分が彼女であつたなら、ろこにも……驚くべき神の愛を偲ぶ事が出来るであらう……あ、……。

ろの心だつた眞柄伊楚子の求めてゐたものは……。

ろの度に彼女は海の彼方の米國に居ます母のみ戀しくなるのだつた。

神の恵み給ひし一人の親。富こころあれ……極めて愚かな子を貧しき中に養ひ乍ら……ろれも心の貧しき忍び難き苦痛をもに、にして養ひつつある親。……と思ふ時に、現在の己が努力なき消極的生活ろれも殆んき情式を超越した沈愁にも較べられざる生活の頽退、信仰の動搖の悲惨な自己の足趾が涙ぐまれる程貧弱でならなかつた。満足に母を知らぬ子程精神的生活に強烈なものはない。ろれ程ゴツドの僕さしても同じ兩親を有する人の子から比べるなれば

何かにつけて不自由で悲惨で、理性的なものはないと同時に情熱的なものはない。かへり見れば眞柄の心は……自然的に自發的に禁欲生活に……宗教的生活に……信仰生活に突入したのは明らかであつた。

然るに彼女の涙線には、以前と異らない或る流れといふものが存在して居るこころを自覺した。

されどもやはり快活な小女で彼女はあつた……。救はれた者は幸ひである。

彼女の涙線の流れは神の愛に輝いて見えた。

ゾンネーの様な瞳の内には、ろの限りない神の愛でうるんでゐた……。ろれが繁くなれば涙こなるのだ。

涙……それは何物よりも總てに暗示的な悲愛を誘起してなげかひの面に蒼白く心を染め出だす。一秒毎に細りゆくやせ馬の荷車を見送つて居た彼女は急に寂しい心に捕はれて涙が涙が流れ出るのだつた。

ろの涙ものうき涙によつて新なる心像が彼女の薄い小さな胸に浮き出だすのだつた。

たゞ心像さいふより仕方ない感官を超越した一種の幻覺に眞柄の胸奥は……樺かんばの葉の様に太く波打たないわけにはゆかなかつた。

眞柄は且市の水郷に生を得た純正な且の文學的な……美しい感情や思想や想像の永久性に豊富な天然の樂園に……紅葉の丘や、みぎりの海原に銀盤を弄して居る大杉の面影が忘れもやらず思ひ出されるのだつた。

つまらない氣分に充されて伊楚子は寄宿舎へ歸つてからもろの日中おうおうとして楽しむ氣分にちつともなつて見様と思つてなれないのだつた程、麻の様に心が亂れてならなかつた位ひ、何一つとしてやつて試ようさいふ活氣が起らないで了つた。

沈々として更けて行く秋の夜は極めて淋しくながきものを、さらでだに暗き外面に降りみ降らすみ、ひねもす。

蕭々として庭の樹葉を誘ひゆく音ころは、滅入る様な物の哀れを告げるかみ疑はれた。

「どうしてゐらつしやるのやら……。君と別れてもう二ヶ月餘りもたつて了つたもの。再び歸りませぬいさしの君にしあればあゝ將して……燦川の腕

に抱かれるのだらうか。あの固い鐵の様な腕に。あゝわたしH市の君が戀しい。」
ミ伊楚子は思ひ出に迷つて居た。

眞柄は……全く火の女であつた。情熱の女であり、冷淡な氷の女であつた……。

机上のカナリをジツミ哀れつほい涙ぐんだ瞳で凝視して居た。頁を開いて小さな活字を無心に眺めたり、ここはペンに紙の油が乗つて書きにくかつた處だ……等ミたはいもない事迄考へまはしてゐた。

黒い太い灯影が床に落ちて一心に勉強してゐる雀部の影ミが合して嚴かな氣分を表はしてゐた……。

……時計は正に八時を報じてゐた……

眞柄は何を思つたかフト眼をうらして時計を視上げた……。ミ同時に紅を呈した伊楚子の顔には時ならぬ微笑の波が漂ふてゐた……。凄艶な魔女の……。

何か心快く肯きながら意勢よくインク壺の蓋を開いて机の中から小さな白色の封筒ミレターペーパーミを取出して直ぐ走り書きに認め出すのだつた。

認め終るや釘に引掛けてあつた名仙の派手な縦縞の羽織をはをつてバセイジへ飛出した。

雨に……いつの間にか風が加はつてゐた。

物凄き夜の暗は庭の樹々を占領して、そこから一步も動く事は出来ない程であつた。

殺氣に充ちた伊楚子の深い瞳は恐ろしく決意に燃え猛つてゐた。

平素なれば……灯びつけてでさへ一人では怖さにおびわて居た彼女も生來男優りの氣象に支配せられて……靴音高く大地を踏み鳴らしながらバラソルに軀を被ふ様に足早く暗中にまぎれた。

「アヲ真柄さん。」

雀部は魂消る聲に身も空に……後を追ふた。

次第に――。

靜寂なりし夜は人の眠りをさまして、暴風雨になつた。

海原の浪は又狂つた。

屋根から瓦をぶちつける様な濱邊は……高繩半島の一角に雲霞の如く攻め抜く海神の暴威に長く短かくほわたてた。人家の不安は刻一刻にますばかりこ

なつた。

寢耳に水のこの嵐に電信電話は全滅した許りか、市内は早や暗黒の動搖に戒嚴命下の市街に化し警官隊のサーベルのみが……氣味悪い光りを映り返して右往左往してゐた。……それが電燈の消滅した家の窓のすきからでも、やつこ見られるのだつた。……うれさへおぢおぢこする位ひだつた。尼港の最後の日を偲ばす様な無慘なる自然に人生の戦ひ……。

鉛の様な雲間から紫の焰が起るこ間もなく地上の總てを破壊し燃去するかこ震駭する惡魔の呪咀の如き電光は音響も聞えず猛雨の中に明滅を繰返してゐた……怪訝な光線の下を淡く地上を漂ふが如く揺れ動く一点の黒影は濱へ濱へ薄れ消れてゆく……それは伊楚子の細つほりした姿だつた。

雀部は彼女が視野に映じた時心からおきりあがつた。

刻薄な節子の心は俄かに躍動した。

眼深く被ふたマツトの頭布からは瀧の様に流れてゐる水煙にかすむ瞳は睫は
.....。

真の姉よ。真の妹よ。.....。ミ契つたあの夜の優しい物語りが朧な幻覺に表はれて、雀部の正純な魂ひの中から浮び出されるのだつた。

あの夜——。

憂鬱な下弦の月影に濱邊を逍遙した夜の甘き思出では再び愛着の甘きものとして悲愛な色彩の内から眞珠の如く輝き出して來た。

.....。燦川は雀部や眞柄と固く握手して別れて堤を昇つて行つた

.....。雀部は燦川の握つた手が痛たくつてたまらなかつた.....。雀部は生れ落ちて初めて握手したらしかつた。その後の事だつた.....。

「——わたし生きて居られない罪人ですわ。」ミ雀部は神經的に眞柄に云つて悶わつた.....。

「なぜなの？」

「だつて私神様にすまないのですもの——。」

「はは.....。心が？」

「わ——。」

木立の如く.....。たちすくんだ眞柄は冷やかにされぎ重々しい口調で空の雲を眺めながら片手を雀部のふんはりしたショールダーに掛け咬いた。

月も星も黒雲も白雲もすべて清く清く神の御魂の様に大空に動いてゐた。
二少女のチャンテーな瞳は等しく、ろれ等へ投げられてゐるのだつた。

「節子さん……ろうぢありません。わたしそんなに心強かつたでせう。わたし……節子さんにほんごにすみませんごきよ……、さうして此處迄？」
雀部は袖で泪を拂つた。せき上げてくる心臓の鼓動の爲に切々に答へて海原に落ちた蒼白の光線の變化を消ぬも入りたい様な儚かない氣分でウツトリに移り行く様をみまもつてゐた。

「……伊楚子姉様がバイブルを急に机の上に御置きになつて……ろの儘外出なすつたので、わたしも變んに思つてろれごはなしに後を追ひました處、あなたは蒼社橋筋へいらつしやるらしいので益々變んだつて思ひまして……悪い

ごはしりながらも……。」

伊楚子はろうだらうごは豫期してゐたものの、今更の様に狼狽せずには居られないのであつた。

「あ、節子様。わたし決してあなたの姉様のコーリファイケーションは御座いません。わたし胸がはりさける様になりますわ。わたしころ……。」

「では伊楚子姉様……わたしの罪も御ゆるしなして下さらないのね……。」
節子は代々泣いた。潮の様に泪が流れた。

海原から眼を移してソツミ伊楚子の顔を覗く様に節子は見守つた。節子は小柄な男らしい女であつた。

寒い濱風が二人の燃ゐた頬をすべつて逃げた。

老海茶色の袴がろの度に弓なりになびいてゐた。

『では眞柄様……僕は、御友達がいらつしやつたのですから失禮します……冬休に又御目にかゝります……幸福に……』と哀傷の心にあふれた青年の別れの言葉……ろれから次第に薄らぎ行く沙濱……

別れるのだ——と思つた時眞柄は泣いた。

松山のグラウンドで野球で負傷なすつた時御たすけした事もあつた。勿來の脊で晝飯をした事もあつた。テニスマッチをした事もあつた……

ろの青年の言葉が最後ならうこは……。さればこゝろ、ろれは二少女の腦裏にはあまりに強烈な印象であつた。

『いいね。わたしは、わたしはあなたを許さないこは申しません。』と彼女……

……伊楚子は、鋭く尖つた感情の動搖の中からやつここれ丈け辯明し得たのであつた。

伊楚子の神経は燦川の冷淡で而も多情なキリスト信者で、而もキリストの反抗者らしい彼の物哀れな……汚らはしな心の奥ころの野望……、ろれらが只彼女をして氣死の状態にまでもおびき去らねば止まぬらしかつた。

又一面……雀部が自己に對する罪なき執着と憧憬の爲に生み出だされたりしいこの事件について殆んき狂亂の如き自己の姿を像想する餘致は全くなかつたろれは當然であるべきだ……。

『あら……許して下さるのですか？』

雀部は眞柄の側につつ立つたなりで潜々こ泣き入つた。

「わ……。許さないでございませう。ちつともあなたには罪はありません。」
「……またあんな事仰在るわ。」

「あれごらんない。あの美しい月の光。」

伊楚子は思ひかへして……。笑ひをたゝけて云つた。

節子も……。新な氣分に甦つて仰いでみた……。

「……月はいつも一人ね。」

伊楚子はヒステリカルな事を云つた。

「内氣な温和な方であの月の様な心で生きる人でせう。」

「……わ。さう。」

「わたし共も眞に清い信仰によつて生活しませうね。」

「わ……。」。ミ瘦形なすらりつとした伊楚子の肩にもたれた。

「節子さん。わたしはエス様の愛によつて清く結ばれてゐるのですわ。」ミ
いふ聲は冴わてゐる……。

「アラ。わたし今夜は夢の様にここまで来て夢の様なうれしさがこみ上げて
來ますわ。」ミ節子は、總てを忘れたかの様に嬉しさにさゝやいた。

「神様の御使ひをなすつたのですわ。」

「いやですわ。わたし姉様のお側で勉強するのが何より楽しいのよ。ね。早
くかへりませう。わたし遠くへ歩きつけない爲めか足が痛むわ。」

蒼社の森を左に見て、濱を下つて近い道を取つて歩んだ……。ピチヤリピチ
ヤリミ波が打ちよせてゐた――。

「わたし節子さんが只一人の味方なの。」

「わたしの様な者でも？永久に妹として愛してねえ。」

節子は寒むさうにいつた。

「地球が減しても……。」といふ聲は伊楚子らしい。

……あちらこちらの電燈が松林の岡から寒けに星の様にふるへてゐた……。

あの夜、このメモリーが節子の正純らしい魂の中からさまざま書き出された瞬間に現在の眞柄の心を恨めしく思はないわけにはゆかないのだつた。

それは片思ひであらう……といつて節子は伊楚子の他人に制肘されない自主的な……行爲を理解してゐないでもながつたが……丁度、瞬間瞬間の恰も静寂だつた舞臺の上に、複雑な面も深刻な心理描寫がふつつりこ切り落された様

な最初からドラマのターニングポイントをしくみこしたドラマを観る様な気分を感受させる行爲……。

「何故私に相談して下さいさらないのだらう。」といふ、懐疑の念に淡い泡沫の様な物足りなさを泌々こ吐くこもあつた。それも温情にもわた内氣な世間のせまい節子としては無理からぬこころではあるが……二人は淡い誤解をしてゐただ。

眞柄は哲也を極度に敬慕するの念を、雀部へ對する姉妹の熱愛の情の不自由な状態に主として伊楚子の愛は二分されてゐたから、それを囁きたてる多くの異性の遠視の中にあつた爲めでもあつた。

雀部は……瀧壺の淺瀬を渡る様な氣持で洪水になつた様に水の充滿した小路

をつまづきつまづきやつみ濱に夜目にも見分けられる邊までたどりついた。

地上の總ては影を落して水聲は時々烈しく轟き蓋して濱を衝激する白龍の如き怒濤は小高い岡をも麗はしかるべき思ひ出の濱も堤もやがては港の泊りの船も、人も家も呑み了ふかの如く……氣味悪き電光の明滅は刻々に沈滅しゆく人類のローマンスたるべき全實在を照明してゐることも思はれる程鉛天の一角から或る偉大な……『黄金は奪はれ貧しき者の地上は平等な努力と愛に甦る時が来る麗はしかるべき花はたゞ春の自然の影に、やがては實を結ぶ……運命は平等だ。財は人の子の財ではない。己の與へた食物だ生命だ。己は自然へ返へさすのだ。やみ人よ失戀者よ貧困者よ力弱き者よ虐けられし者よ罪人よ己は貴様達を救ふのだよ。運命は平等だ……』といふ暗示でも受けたかの様——濱に

倒れた眞柄の脳髓にはこの光景が反映して居た。

さつきから老松の根に倒れてゐた彼女は楽しい氣分に取巻かれて只一人心の平靜な恐ろしさの中に物思ふこともなく沈みゆく地上を凝視してゐた……

うの姿を眺めた雀部はおのれ、やれ、水を分けても必死になつて彼女に近いた。

『伊楚子さん——』。

節子は枯れ果てた聲を絞つて後からやつみ呼びかけた。

伊楚子は夢現に後を見返つてみた……

『しつかりして下さいよう。わたしですよう雀部ですよう……ね。しつかりして下さいよう。』

節子は今張迄切つた胸も一時に失せやるこハラハラと熱涙が頬に流れるのを
覺れた。

『息が苦しい。』

伊楚子は苦し相に節子の袖を固く握つて離さなかつた……。

寒れた蒼ざめた花やかさも艶やかさも跡形もなく消失せた伊楚子の無様な顔
色を覗き入るさへ恐ろしい死の影におびやかされてゐるかの様にガクガクと身
標を禁じ得ないのだつた……。

節子は伊楚子の身邊から一つの封筒を拾ひ上げた。その上書には濡れて定か
にはわからないが……大杉哲也様と認めてあつた……。

それで全く讀めた——。恐ろしいくわだてである。

さしもの嵐も約三時間後にはすつかり勢力が衰へ出して来た……。

それを幸ひに又恐ろしく出水のした小路を危く踏みしめ踏みしめ伊楚子をた
すけて歸りを急いだ……。

伊楚子は——死からのがれた。

……それからさういふものは、幾日も幾日も悪寒を感じて意識明瞭ならず……

……依然險惡であつた。

体温は四〇度近附を律つてゐた。

或る朝一通の手紙が来た。

節子が代つて開封してみた……それは燂川安夫からのレターであつた。

それは冬休は歸へられぬからさういふ事であつた。

『まあ。さうしませう。』

雀部はもう一人でみてゐるに堪わられなかつた。誰れにも見付からぬ暗い場所
でただ泣いてゐた。

コスモスが白に赤に少し色褪せたれぎ、落葉の庭すみで可愛いく咲いてゐた
うれも何者かに裏切られて……。

近き者は裏切る鬼である——。

別れて後の語物はこんな長く續いた——。

伊楚子は哲也の膝に崩れて靜かに溜息をついて紐をいぢくつてゐた……。

二人はほんごに幸福だ……ご云ひ合つた。

海を越つて憧れのH市へ眞柄が遊學するごごにきめたごごは様々な事情があ

つたけれぎも、主なる原因は將來高等教育を受ける下準備の爲めであつた……
うれにしても奇しき宿命にたぐり寄せせられたる二つの魂かな。別れてもま
た相ちぎる定めご神ならぬ身の豫期せないごごであつた。

指かがなへて君の來ります日を、U港の埠頭にまつひまもあらばごご一學期
も残り少ない冬寒の港に漂然として姿を浮ばせた伊楚子……るの腫……るの
足は新らたな希ひご信仰に躍り上つた。

新らしかるべき町の香ひに浸りゆく第一歩をU埠頭に踏下した時、新鮮なH
市がU町續きにボーご眺められてうれしかつた。あの町の何處かに淡く大杉の
腫が輝いてゐる如くにも思はれた。

火の様な彼女の腫は新生活に突入するごごが出来る心儘な自分を幸福に思ひ

思ひ……重つたいトランクをやつこ車のある處迄はこんだ。

同じジャパン人であり乍ら數多の異人種に圍まれてゆられてゐる様な氣分で
Y女學校へ車を馳せた……。

四五日といふものは何も手につかない程手続きやら、舎生との交禮やらで眼
の廻る程急がしかつた。

自分の室にあてられたルームを掃き清めてから、やつこ安神したもののやは
り夢でも見てゐる様な氣がしてならないのであつた……。

過去の總てを忘れて——こ固い固い決心でゐたものの寢なれぬ部屋に夜をむ
かへるごごに思ふまいこして夢に浮ぶものはT校長の姿や叔父の面影であつた
何故自分は忘れられないのだらうこ苛めてはみたものの深い心の痛手は一時に

は消ぬやるべくもあらず、おやみない心の嗚咽に更けゆくここもあつた。

松山の燦川安夫の居る地のM女學校へ轉校した雀部節子のここが忘れ様こし
て忘れられぬ最後の強い刺戟であつた。

二年といふ月日をH市に過すべく流れる様に移り來たろの日からもう數へ
るここの出來ない程幾日も新らしい物珍らかな日が続いて行つた。

でも……それは伊楚子にこつては幸福な日であつた。

彼女は思ふ儘の若かさをエンジョイする學生生活を送つてみたいこ思つた。

こいふのもH市は幾分E市よりも異國化した人人でみたされてゐたから……
さまで伊楚子のテキパキこした生活振りも人目に掛からなくなつてゐた。

持つて生れた病弱な軀の爲めかH市に來てからの種々な心勞の爲め、神経痛

を起して冬休になるのを待ちかねて寄宿舎を出てS町のある中學校の教師の家
庭に下宿する事になった。

第二の室に定まつた小さな部屋からまた通學する様に定まつた或る日偶然に
も……………大杉とF町で會つた。

『アツ眞柄さんもうHへ……………。』

『エ……………。大杉さんでせう。まあよく御會ひしましたね。私都合上早くこち
らへ参りました。御宅は？』

眞柄は息をはずませて問ひ寄つた。眞柄が柔かな手を差しのべた……………大杉は
軽るく握手した。

『僕の宅ですか……………御案内しませう』

哲也が前に立つた……………伊楚子は得々として後に従つた……………。一年あまり過ぎ
て……………また二人は奇しくも會つた。

二人が室に這入つてからも激けしい動悸の爲めに満足に話が出来ないのだつ
た……………。

『ほんまに夢の様ですここ。』

伊楚子は室の裝飾振りを注意深くみやり乍らなつかしげに云つた。

『僕實際驚きましたよ。案外早く來ましたね。淋びしかつたでせう。』大杉
はお梅が買つて來たお菓子を盆に入れながら楽し相に微笑み微笑み云つた。

『わ——私淋しかつたわ。』

伊楚子はかつて聞き覺わのあるアクセントで恥かしげに呟いて袴の二本筋を

しき に氣まり惡氣にいちつてゐた。伊楚子も何んだか笑つてゐた。

『あれからもう一年あまりになりましたね。大分變つてゐらつしやる様ですから……。』

『わい……變りましたよ。燦川も絶交しましたし。雀部にも別れましたし私ほんきに淋しかつたわ。』と彼女は美しい瞳を輝やかせて低い聲で云つた。

『あ……絶交なすつたの？ ひさいね……。』

『だつてわたしあの方に裏切られたんですもの……。』と両手をもみもみ首を傾けた。物寂れた彼女の顔色を初めて知つた哲也はハツミためらはぬわけにはゆかなかつた。

『ごんなに……。？』

『私何んにも皆云つて了ふけぎ私の兄様になつて下さるでせうね……。』と伊楚子は向氣になつて微笑んで云つた。

『僕ですか……。兄様になられたら……。』

と遺の哲也も伊子楚を睨らまへて云つた。

『わい……。私うれしいわ。このHにだれも知つた方つたらゐらつしやらないものね……。兄様も呼んでもいいのね……。』

彼女は何んだか取こめもない口調で念を押して問ふた。

『いいさいつたら。ぢあ僕いいちやんも呼ばうね……。』

『いいちやん？何んだか子供らしいわ。けさいい事よ……。』

伊楚子は足を痛た相にくずして鞆下の紐をゆるめたりした。もう以前の様に

遠慮をする女性ではなかつた、それとも互ひになつかしきあつてゐた嬉しさに抱き合つて泣きたかつた程精神が昂奮してゐるのだつた。

船で行かば七時間もかゝる海の果てで……カナリーを胸にした二人の佳人の……今更の縁にたぐりあはされた幸福なロマンスはまた新らしく結び直されて行くかと思はれる程思想に生きんとする可弱き若人の總てを溶かしむかさいぶかられる位ひ、互ひに可愛ゆくて仕方なかつた。

カナリーの序文には次の様な文がづらなつてゐた。

……私はここへ消ぬ失せ様も……この可愛いカナリーは、地の滅びゆく迄淋しくジャバンの地上にござまつてゐます。だれかのあたたかなハートに舞ひこの小さな魂ひを抱いてゐて下さる方が、たしかにジャバンにゐらつしや

るのです。私はまだまだ、はつきりした魂ひを残して置きたかつたのですが、いろんな感情がまつはつて……もうこれ以上作る勇氣にてはちつともありませんでした。

もう春が來ました。花が東京や大阪の市にも運ばれる頃です……私の運命はさうならうとも、このカナリー文は、これ以上せちがらい世をみせたくなかつたのでした。

よし私はさうなつても、指かがなへて……すべてをまつてゐて下さいませぬ。私さいふ私は……火の輝く星なのです。そんな處へみんな流れ方をするやらも知れませぬ。

いつの日か……私は考へてみました。

洋を渡つて新鮮な私の魂ひがまたジャパンにつきましたら……キツト昔を
偲んで下さる方があつしやるのです。今の時には、私は……たごへ何處か
のコーナーで異人に圍まれて逍遙してゐても、ジャパンを忘れてゐないさだけ
…偲んで下さるでせう……。

では薄情ですけれごこれにて……擱筆します……。

……今この序文を哲也が思ひ出した時に、また別れるのぢあないかしらご
いふ淡い不安を驚愕に迫られて了つた。なんのHに來た以上は己のものだ……
……何んご云つたつて他人の所有物にやさせんごいふかいはぬか……それ
らしき淡い努力を惜まない勇氣と新生力ごが彼の双腕に鳴つた。みればみる程
可愛い伊楚子である、四肢の思ひきりのびた格好のよいタイプに……それから

愛の泉を湛わてゐるかご疑はれるろのアイ、それご理智にたけた瞳の動き振り
……何んご云つても才色共に優れた傑作だご哲也の優しい心の中にも云ひ様
のない幸福にざはめいたあるものがあつた。こちらの女學校へはいて而も下宿
に居る……それは彼にまつても又伊楚子にまつても……最も好都合のごご
に違ひなかつた。ごんなにして楽しい生活をしやうごか、ごんなにしたら一度
でも多く戀の歡樂に耽る……ごいつては御幣があるけれごも、ごもかく、
ごんなにして淋しき人生に力ごなりあつて行けるかごいふ様な豫想がもう二人
の脳裡にそれごはなしに湧き上つてゐた。二人は會つたのだ。今面ご面ご會ひ
つこしてゐるのだよ……ご咬いてみたい程互ひにうれしさに、何も話しが出
來ずニヤニヤしてゐた。

伊楚子と哲也は疊二尺位融てたなりで、親しいのに、ちつとも動けなかつた。も少し近よつてべーせなり………うれは出来ぬにしても、近よる事や、一寸立つて坐を進める事位は出来相で出来なかつた。哲也は哲也で、愛してもらひたいので顔を美しくみて貰をうさか、男らしく兄さんらしく印象を與へたい………いふ慾求の爲めに、又伊楚子の方でも、全じて、何處を見ても知人のない………日では只一人のラバーミなるべき相手なのだ、いつまでも愛して………希望の念に燃れてゐたからやたらにしなを作るより外に何もウブな二人さうしにはする術がないのだつた。二人は何んだかきまり悪くなつた。

「お梅。お茶を出して呉れない？」と哲也は云つたが隣室の女中部屋にはいつの間にもやらぬのからだつた。

「………いゝこごよ。お菓子だつて澤山ありますもの………。」と半ばなれた様な淑やかな聲で制した。

「あなたお菓子好き？」

「………。」

伊楚子ほほんで哲也を睨らまへる様な上目越志に眺め乍ら、白巾で口元を被ひ乍ら水菓子をほをばつた。

「ぢあ………虫歯が多いでせう？」

「まあ………御じようだん仰有つてはすかしいわ。」

伊楚子はうれを機會にグツと前にのめつた。

哲也も待つて居たといふ風に坐を立つて近よつた。

二人は初めてじつこみやいこみをして又子供の様に笑つて顔を反向けて了つた。

『あなたE市のラバーがうらやんでゐるでせう。』

哲也はフツミ大膽な話をした。

伊楚子はドキツミ肝を冷やされた様に真面目な態度に歸つて哲也の口元をみつめてゐた。

『また御じようだん仰有つて私泣くわ。』

伊楚子はつまらないと云つた風に横にむいて云つた。

『……ゆるしてね。僕うれだつたら……』

『…………。私E市の乗馬倶楽部の方々や燐川にはちつとも執着はなくて

よ。わたし彼等に裏切られたと思へばつくづく男性が危険の様に思はれてなりませんわ。わたし……やはり弱いのです。裏切られた當時ころ齒鼓みをギリギリ鳴らせて口惜しく思つてゐましたが、時はちつとも私にその機会を呉れなかつたのでした。わたしはさんにして復讐してやらうかと悶わてゐましたが……やはり何も出来なかつたのでした。わたしはほんこにあの天保山の濱で死を決して寄宿舎を飛び出した事もありましたのよ。ね……相です。暴風雨の夜でした。以前御話しましたでせう。あの時なの……。ろんな方にさうして……。

『あ、よく分かりました。ぢあ全く雀都も真柄さんは絶交なすつたを信じてゐるわけですね……。』

「信じていいわ。節子さんこそ憎くらしいわ。表面だけは無二の親友ださみせかけて、燦川との間を皆んなあばいてゐた恐ろしい女だったのですもの……ほんまに鬼です。……………」

伊楚子は惱ましげな蒼白の顔を硬直させて神経的な細高な聲で云つた。

「ぢあ……………今の處あなた御一人ですわ……………淋しいでせう？」

「わかつてゐますわ。だから——。」

「わかつた。もう追及しません。」

「わかひて？」

「あ……………」

哲也は子供の様な返事をして、燃ゆる様な鋭い瞳を彼女の胸の邊りへ落した。

伊楚子は何か云はうとしてつまつたらしく疊みをみつめてゐたが……………

「アッ。私持つて来たものがありました。」と女關へいろいろ出て行つた。

その後姿をぢつと送つた哲也は、いい女だなーと思はずには居られないのだつた。さういへば露骨だけれ言はず語らずの位の刺戟は當然起らぬわけにはゆかね程、髪結び上げた後見ゆや、白い首筋……………それから心地内曲の小さな据捌きをしてゐる足ののび方……………それらがあつさりとして學生らしく調和してゐるので、めかし込んだ毒々しい女性には見られない印象めいたものであるのだつた……………。美佐子に變つて……………自分をたすけて呉れるものはこんな美しい女性なのだと思へば思ふ程彼は染々この世に生れ出たこゝを幸運に思つた。二人は勇勝者の地位を築かねばならないのだと哲也は肩をうびやかして軀

を揺つた。

「……………いいちゃん。」

哲也はあまり遅いので呼びかけた。いいちゃんこいふのがきまり悪いと思ひ思ひ仕様なしに云つた。

「はい……………」と伊楚子が軽ろやかに返事して、大きな包み物をかゝゐてやつて来た。

「うんなものを僕に？」

「これは私のほんの志ですから永久に私を——て下さるのでしたら心快う……………」

と「ハハハハ、、、、。」

「だつて私真剣なのですよ。」

「……………いや有難う……………何んですか？」

哲也はあつさり品調べを手取早に問ひ詰めてみた。

「西洋菓子。」と伊楚子は追に眞赤になつて云つた。

「ぢあ僕の好物ですね。早速……………」

「うっませう。」

二人はもう遠慮せない事にした。ものゝ、やはり一つお菓子をほをばるにも仕様のない位思惑が集つて来るのだつた。みんな手つきで……………こいふ様な好氣心が起るものだ……………。しかもかく、二人は晝食時をも忘れて菓子許り食べてゐた……………お梅も何處へ行つたのか晝になつても歸らなかつたらしい……………。

「わたしもうほんごに幸福になれるわ。ね……」

「伊楚子様さへ……」

「まあ……」

伊楚子は臉を張切れる丈け見張つて吃驚いた様に哲也の火の様な手の温みを感じた。

「哲也さん。ぢあない兄様。」

「——ごうしました。」

「あなたね……」
「ごいふ伊楚子は熱い息を苦しげに溜めては吐いてゐた。

「早く……」

「ぢあいいわ。」

伊楚子は靠れた柔らかな手で哲也の膝をすねつた。

「あなたはろんなに……」

「ぢあ云ふわ。あのね。Hにラバーがゐらつしやるでせう。いいゐらつしやるのです。それを明かして下さらなくちあ私……」

伊楚子は急ぎたて、哲也の軀を揺つた。哲也は今更の様に當感してごう云はうかきためらはぬわけにはゆかぬのだつた。眞實を云はねば罪だ。ご考へた。

「居るごいつてよいか居ないご云つてよいか。あの手紙の一件で騒いだ山川民子つて云ふ賤しい家の子がそれは悲惨な境遇になつてゐるので救つてやりたいと思つてね……。時々來るのですが……」
「ご哲也は當り障はらすの逃げ事を云ふ様な口振で云つた。

「それ丈けなの？」

「まあろう……。」

「アラ弱い方ね。あなたさんな女にでも御交際なさるの？」と伊楚子は向氣になつて哲也を睨まねて叱る様に云つた……。

「僕……。ろう云はれちあ面目ないと思ふが、仕方なかつたのさ。まあいい。」

「いいね……。ろんなこゝでしたら、私絶交いたしてもいいこゝ？」

「ろういつちあこまる。僕の身にもなつて御らん……。」

「馬鹿を仰有い。あなたより以上私はさんなに……。」

伊楚子は、低い聲で哲也の云ひ草を打消してじつと彼をみ守つてゐた……。

哲也は襟を掻き合はせて云つた。

「それは僕戀をしてゐるのでもなんでもないのだから、あつさり手を切つて了ふつもりだ。」

「ね……。ろうなさいまし。ね……。あんな女を對手にして何んの利益があるの。近所の子供迄笑つてるぢあありませんか。よう……。」

「承知した。ぢあ、いいちゃんも僕を……。」

「それはさうでもね……。」

「わかつて？」

「あゝ。十分理解つてゐます。」

泣く泣く二人は鼻を突き合つた。熱い涙が今迄の心労をうつたへる様に……。

めなくあけぎ出るのであつた。

ろの夜は無数の星がきらきらしてゐた。宵浅い星空を仰ぎ乍ら二人が家を後にした時からいつの間にもやたら全く夜になつてゐた。U町とH町ををつないでゐる御幸橋に通ずる一筋道路を夢心地で歩くのだつた。T町の裏道に當る道路で今ころ年々人家が増築されて次第次第にろの思ひ出の野邊を浸奪して了つてゐるけれども、ろの當時は淋しい細い畑道であつたに過ぎないのだつた。冬枯れゆくK中學の……今はS中學であるけれども、木立ちや、寒風が……なんさはなしに肝に秘み入る様だつた。夜鳥が何處か遠くの松林あたりでも鳴いてゐるのか氣味悪い迷信に心を亂すこともあつた。下駄の響きが冴けて邊りに擴ろごつては何かへぶちあたつてゐた。大きな松の木がマツと遠暗みに薄絹の

様に浮き出てゐる行詰まりの道路がTの字の形に見初めた頃にも、やはり一歩でも歩むのが惜しかつた。されど伊楚子は風呂敷を折目正しく小さく右手に持つてさつささ無關心に歩むのだつた。送つてくれなくても……ここぼんだ彼女としては不思議ではなかつたものゝ、最少しは夜をエンヂョイしてほしかつた。眞柄はよくこんな僻せに云はうか性質にいはうか好奇心にいはうか、悪く云へば冷淡な態度に急に變る事があるのであつた。何故だらう。ろれが却つて哲也よりはるかに上氣してゐるさういふ伊楚子を裏書してゐることも彼は考へ考へした。こう判断がつけば、何もいぶかる事は無いにしても、生れて初めてでないのだからとも思ひ返さずには居られぬのだつた。然し且では眞柄と歩くのは最初なんだとも考へてみたが結局……眞柄は道で立ち話しや道草する事がい

やなのこ、いくら夜道だといつても悪鬼の様な執拗な瞳が何處かの陰間からギラギラと注目してゐる様な恐怖の念にたゆす驅られてゐたからだと思つた。ろれが爲めに、常に大きくならんこする哲也の聲を制してゐた。ろのくせ……澤山話しがしたいのだつた……がろれが恐ろしくつて出来ないものであつた。ろれが罪にならぬ事だこ知つて居ても……。家の中では笑つたり泣いたりするこはあつても、外へ出たら眞面目になるのは普通の事だ、殊に、友達の様な氣であるので尙更のこで……何も怪しんだり物足らぬこ思つたり冷淡だこ考へる事は出来ぬ不合理な女性を理解して居らぬからだ……こ哲也はしよけた様な歩き方をしながらろれからろれへこ考へつめてゐた。ろれはろれこして、今日一日中淋しかつた自分の書齋を賑やかにしてろの上

……こ夢の様に夢の様なチャンス^{チャン}スを危うく捕へ得た危ふさに身をすくめてみたり、肩を張つてみたりした。ろれこまた……もう永久

別れるのぢあないか……こ新たな聯想が湧いて來た。同じH市のS町とT町に居るこは、E市に較ぶれば道程は比較にならぬ程近いのであつたが、近いからこて自由に會ふこは出来難いこである。ごんなにしたらいのだらう。眞柄の下宿は、最も物堅たかるべき中學の英教師らしい……ろれではここ迄考へてゐた時にフト名案^{ハッピーアイデア}が彼の頭を遮つた。

『手紙だ。手紙だ。』こ彼は心の中で叫んだ。彼はもう黙つてゐられぬのであつた。やがてT字形の處へ來た。

『歸つたら御手紙下さいね。』こ大杉は眞柄の夜目にボンヤリこふくよかな顔

をみつめて云つた。

「ねね………。出してあげるわ。だけぎあなたが下さる時は小さな封筒にして、一度毎に名字を變へて下さいでないといけないことよ。」

伊楚子は思ひ付いた様にT字形の路上で立ち止まつた。

「ぢあさうしませう。屹度ですよ。」と念を押した。

「ではこれで別れませう。私一人で歸るわ。ね……。」

眞柄は慙う云ふさもう歸る風をしてみせた。

「僕あのF橋邊り迄ホラアークのついてゐる處迄見送らして呉れるでせう。」

さ大杉は優しい顔を可成り硬直させて別れづらいさいつた調子であつた。

「だつてもう御歸んなさい。私迷惑だわ。ホホ、、、だけさいいわ……。行

きませう。」

伊楚子はテキパキと言ひ切つてグツと哲也の袖を引つぱつた。哲也はぢあさいつた風に嬉し相に竝んで歩いてゐつた。左手にはM中學の荒れ果てた校舎が時の慘酷さを物語つてゐる如く呪はしく夜氣を吸つてゐた。行手の高師附屬の寄宿舎も、もう自習時間が終つたものらしく、何んだか底氣味の悪いうめきが夜外にのめり出てゐた。

はるか左手の暗を衝いて牛のうなる様な發電所のモートルの廻轉する響が川底を傳つてくるかと思はれる様に物凄かつた。

二人はうれを聞くさもなしに夢心に歩んでゐた。やがて右手に彼女の下宿が草野を隔てて見られた。千日前や新天地の興行地邊りがバット空を焼いてゐる

のが彼女の居るこいふ下宿の屋根上の空をも染めてゐた……。

ろれ等が皆大きな瞳で凝視してゐる様にも思はれたが、また世間のすべてが自分等に無關心である様にも思はれて……さちらにしても嬉しかった。ゆくては……二人はごんなシンボルに歩み進まんとしてゐたかといへば、只清く……こいふ神に對する祈りでもう盡きてゐた。

『清くならう。呀れた月の様に。何にもたまに様のない。』

伊楚子と哲也の誓ひ合つた言葉はただこの清くこいふにつきてゐた。世をいつはらず神に頼つて一日一日を幸福に生活して健實な社會の一員ならうこいふ憧れこいへば物足らぬが憧れであつた。ろれが二人の心を清よめて一致させた。ろして満足し合つたのだ。涙の滲み出る程互ひに愛の淨樂を夢みてゐた……

……花園の淡い花達の赤くホツミ戀を囁く様に短かい。

『……では……』

伊楚子は靜かに手を出して哲也を下から上へ見守つた。

『……もうF橋ね……』

哲也は所在なさけな面持を仄見せて佇んで啜いた。今日一日の淡い語らひが追ひたい様な哀愁がジリジリと胸を焼く様にも覺わてちつとこの橋へ靠れてゐたい様な氣に充たされて何かがちぢちぢするのだつた。彼は思ひを込めて握手したものの、別れは今更の様につらかつた。

『では御用心なさいまし。もう會はれるかぎろか判らないこいよ。』

『……ろんなこいを……』